

オブジエクシヨン 181

岡森 利幸

反抗・報復・対応編

本編は、次の15項目からなる。

- ① ガザ地区・報復合戦の場
- ② エホバの証人の悪評ふんぷん
- ③ ワクチン接種後の体調急変
- ④ 勝ちにいくスポーツ
- ⑤ 勝てばいいのだ・サッカー予選のダメ試合
- ⑥ 宝塚のトラの穴
- ⑦ 私人逮捕系ユーチューバーの空騒ぎ
- ⑧ 恋愛のパラサイトたち
- ⑨ 違法薬物と禁断のグミ
- ⑩ ネバダ大学銃撃事件
- ⑪ バイデン大統領・大丈夫か？
- ⑫ 学校給食業者の苦境
- ⑬ 北朝鮮の偵察衛星打ち上げでまたJアラート
- ⑭ オスプレイの欠陥
- ⑮ 羽田C滑走路での衝突事故

・文中敬称略。
・文中の会話文には、筆者が推測したフィクションが含まれる。
・以下の【】内は、新聞記事・週刊誌の引用あるいは要約・意識したもの。

① ガザ地区・報復合戦の場

【毎日新聞朝刊 2023/10/8 一面

10月7日、ガザからハマスがイスラエルに侵入し、大規模攻撃。右派政権のイスラエルに反発。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/18 国際

イスラエル南部で越境攻撃した際、パレスチナに友好的な人々の村ベエリでも多数が犠牲になった。住民によると10月7日早朝、160人以上の戦闘員が村を襲撃し、自動小銃で住民を殺害、手投げ弾で住宅を爆破した。住民の一人「ハマスは笑いながら人を殺害していた。怪物のようだった」

自衛団員15人が立ち向かったが、5人が殺害された。ベエリでは同日、計89人が殺害された。】

【毎日新聞朝刊 2023/10/11 クローズアップ】

ハマス、事前にヨルダン川西岸で工作し、ガザ方面（のイスラエル軍の警備）を手薄にさせる。当日、安価なドローンでイスラエルの監視網を攻略。監視網は探知できなかった。先行の戦闘員はモーター付きのパラグライダーで空から越境。フェンスを爆破。ロケット弾数千発を撃ち込んだ。侵入した戦闘員は約1500人。2〜3週間前にフェンス近くで「抗議デモ」をして、封鎖された境界フェンスの脆弱な場所をチェックしたとみられる。130人以上（のちに240人と判明）の人質をとった。】

【毎日新聞朝刊 2023/10/12 総合】

イスラエル支援に温度差、E.U.はパレスチナ支援継続。ヒズボラ参戦を懸念する。】

【毎日新聞朝刊 2023/10/13 焦点】

ハマスは強硬を貫く。「イスラエルの」占拠に抵抗「西岸でも高い人気。支持拡大へSNSを駆使する。】

【毎日新聞朝刊 2023/10/20 国際】

イスラエル南部の集落クファルアザ（人口約800人）がハマスにより徹底的に破壊された。住民を拘束、または射殺した。市民52人が殺害され、13人が行方不明、7人は人質として連れ去られた。】

【毎日新聞朝刊 2023/10/23 火論】

10月17日にガザ地区の病院で爆発が起き、数百人が死亡した。イスラエルは半日かけて当日の映像などを分析し、証拠を示して、ガザ川の誤爆だと主張した。すでにアラブ諸国では「イスラエル空爆説」が広く受け入れられ、各地で大規模なデモに発展した。】

【神奈川新聞 2023/10/27 ガザ情勢】

ハマス掃討は難しい。（市民の）厚い支持がある。近年はハマスへの不満も一部の市民にあったが、7日の奇襲攻撃でイスラエルに抑圧されてきた市民の大半は喝さいを送った。ガザでハマスへの批判はほぼ出ていない。】

【毎日新聞朝刊 2023/10/28 一面】

イスラエル軍がガザの住宅17万世帯分を破壊。】

【神奈川新聞 2023/10/28 土記】

エルサレムのアイヒマン（注、裁判のとき、元ナチスのアイヒマンは虐殺の理由について、自身に与えられた職務として正当化した）イスラエルはテロ非難やホロコーストを持ち出せば全てが正当化され、異論を許さないような主張をする。】

【毎日新聞朝刊 2023/10/29 先週のピックアップ】

イスラエルの報復戦略、やられたら何十倍にして返す

イスラエル。】

【毎日新聞朝刊 2023/10/30 一面、クローズアップ、国際
イスラエル、ネタニヤフ首相「ハマスの軍事・行政能力を破壊し、人質を取り戻すことだ」「世界から悪を絶滅させる」と説明。地上作戦を継続する意向。ガザでは、空爆の恐怖が絶えない。】

【毎日新聞夕刊 2023/10/31 NewsFlash
イスラエルのネタニヤフ首相は、ハマスが人質解放の条件の一つとして求めていた停戦を拒否する考えを示した。当局の発表によると、双方の戦闘による死者は9700人を超えた。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/1 NewsFlash
ボリビアがイスラエルと断交、プラダ大統領は「数千人の死傷者を出し、パレスチナ人を強制的に追い出しているガザ地区への攻撃をやめるよう要求するとともに、ガザ地区への食料や水などの運搬を妨げる封鎖の停止を求める。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/3 一面
イスラエルが救急車列を空爆、数十人が死傷。イスラエルは「ハマスが搭乗していた」と主張。】
【毎日新聞朝刊 2023/11/6 一面
米の人道的戦闘中断の要請をイスラエルが拒否。協議

は継続。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/6 総合
イスラエル極右政党の閣僚（エルサレム問題・遺産相エリヤフ氏）が5日のラジオ番組でガザ地区への核使用について「可能性の一つだ」と発言したことで、国内外で批判を浴びている。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/7 一面、クローズアップ
イスラエル軍がガザを分断。住宅半数を損壊した。150万人が避難。神出鬼没のハマス、トンネル網が抗戦の要。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/9 木語
イスラエルがガザへの水、電気、食料の供給停止に踏み切った。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/13 一面
ガザの2大病院、（自家発電していたが）燃料不足で稼働停止。未熟児2人死亡。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/13 総合
国連のガザ職員100人以上犠牲で本部に半旗が掲げられた。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/17 総合
イスラエル軍発表、シファ病院にトンネル入り口、武器を積んだ車や人質女性遺体を発見した。

インドネシア病院の関係者「もはや患者に医療サービスやベッドを提供できない」と語り、病院として機能を完全に停止したことを明らかにした。ガザ地区の二つの通信会社は（発電機の）燃料が尽きたため、通信が完全に停止したと発表した。」

【毎日新聞朝刊 2023/12/28 国際】

中東で欧米品不買の波がSNSで広がる。「イスラエル支持国に利益を与えぬ」

【毎日新聞朝刊 2023/12/2 土記】

英国放送協会（BBC）はハマスをテロリストと叫ばないことを編集方針で決めている。その後「英政府によりテロ組織に指定されているハマス」という表記を使い始めた。」

【毎日新聞朝刊 2023/12/5 一面】

イスラエルは、ガザ南部にも地上部隊を侵攻させた、24時間で700人以上死亡。攻撃対象を全土に拡大。安全な場所はどこにあるのか。」

【毎日新聞朝刊 2023/12/7 一面】

イスラエル、ガザ戦闘2カ月、南部の最大都市に侵攻。軍は5日、ハンコニスに「地上作戦開始後、最も激しい攻撃」とされる空爆や砲撃を実施した。」

【毎日新聞夕刊 2023/12/13 特集ワイド】

寺島実朗さんが見るガザ侵攻。反ユダヤ運動着火の懸念もある。イスラエルは、なぜあれほど激しくパレスチナをねじ伏せようとするのか。」

【毎日新聞朝刊 2023/12/15 金言】

イスラエルは今年10月、ハマスの攻撃を受け、直ちに大規模報復に出た。国際社会はガザ住民への同情が広がり、アラブ人やイスラム教徒は団結を強めた。ネタニヤフ首相は過去の報復でイスラム教徒の怒りに火をつけ、新たな過激組織を生む土壌を作った。」

【毎日新聞朝刊 2023/12/15 国際】

イスラエルの刑務所で拘束中のパレスチナ人6人が死亡したと発表した。殴打された跡が見つかった。解放されたパレスチナ人の情報では、看守らによる暴行が横行し、食料や衣服を与えない虐待もあった。」

【毎日新聞朝刊 2023/12/18 総合】

イスラエル首相が人質3人への誤射を釈明した。死亡した人質3人は全員20代で1人はアラブ系遊牧民ベトウインだった。軍との遭遇時、3人はシャツを身に着けておらず、1人は白旗のついた棒を掲げていた。兵士はその場で発砲。2人が死亡した。1人は負傷して建物内に逃げ、イスラエルの公用語ヘブライ語で助けを求めたものの、外に出てきたときに別の兵士に射

殺された。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/18 国際】

ガザでイスラエル兵が押し入った商店の品物を笑いながら壊している様子やイスラム礼拝所でマイクを使ってユダヤ教の言葉を詠誦する動画が拡散した。】

【毎日新聞夕刊 2023/12/22 総合】

WFP（世界食糧計画）は、ガザの人口の9割以上の200万人超が危機的な食糧不足に直面し、約37万人が壊滅的な飢餓状態にあると報告した。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/29 総合】

トルコ大統領エルドアン氏が演説で、イスラエルをテロ国家と主張し、ネタニヤフ首相を「ヒトラーと変わらない」と非難した。ネタニヤフ氏がそれに反論し、エルドアン氏がクルド人への攻撃を続けていると批判し、「エルドアン氏は倫理（道徳）について人を説教する資格はない。】

【週刊文春 2024/1/4-11 イスラエル・ハマス問題】

「ハマスをせん滅するためならどれだけ犠牲が出てもかまわない」「国外にいるユダヤ人への迫害やテロが懸念される」「正当な抵抗運動か」「もともと右寄りのネタニヤフ氏ですから、『パレスチナをすべて追い出せ』という強硬意見に引っ張られる。】

【毎日新聞朝刊 2024/1/8 国際】

ガザ戦闘3カ月、イスラエル軍は北部でハマスを制圧し、中・南部に集中する。ハガリ報道官「ガザ北部でハマス戦闘員を約8000人を殺害した」と語った。

また、中部の難民キャンプはテロリストで満ちていると主張した。】

1. ハマスの奇襲

10月7日、ハマスの戦闘員約1500人が自治区の壁を乗り越えるなりして、イスラエル側に越境攻撃した。人質を連れ去るなどしてから、撤退した。

日常的に物資などが不足し、不自由な生活を強いられるガザ地区のパレスチナ人の怨念を背負い、ハマスがイスラエルに挑んだ。私には、ほとんど自暴自棄の攻撃にもみえた。につくきイスラエルに、何とかしてダメージを与えたいという心情が現れている。パレスチナ人の鬱憤を少しでも払いたい、一矢を報いたいというのが、今回の一斉攻撃だろう。奇襲はその計画通りに、うまくやったと言えるだろう。

この計画では、まずヨルダン川西岸で攻勢をかけ、イスラエル軍の注意をそらして、戦闘員たちは、ガザ地区を隔てる防衛線（境界線に沿って緩衝地帯や高い

壁が作られている)を突破して、イスラエル領内に一斉に侵入した。中にはモーター付きパラグライダーで空から飛び込んだ。

ハマスは攻撃にいちおう成功したが、やられたらやり返すことを執念深く追及するのがイスラエルだ。受けに回らなければならぬ。ハマス側にしても、それによってイスラエルがどう反応するか、十分に知ってのことだろう。「倍返しされること」を、知っていたはずだ。

ハマスの奇襲が成功すればするほど激怒するのが、イスラエル側だ。ハナをあかさされ、警戒を怠りなかったはずのイスラエルの面目は丸つぶれだ。こんな大掛かりなハマスの計画を察知できなかったとは、くやしいかぎりだろう。

弱小の兵力しかもっていないはずのハマスに対して、最新の兵器を取り揃えている武器大国イスラエルが、本気になって陸海空の大掛かりな戦闘を開始したわけだから、たいへんだ。しかも、イスラエルはガザ地区の物流や各種インフラ・エネルギー設備を抑えている。ハマスは、ぜんぜん勝てそうにない相手に戦いを挑んだことになる。

2. 人質作戦

ハマスの奇襲攻撃によって、イスラエル側に甚大な被害が出たのは確かだ。約240名のイスラエル住民が人質として、ガザ地区側に連れ去られたのが、大きい。人質をとることは「テロリストの所業」だから、どうだったか。「正当な抵抗運動」に疑問符がついてしまう。人質を取ったことで、イスラエル軍の攻撃が手加減されるとでも思ったのだろうか。

イスラエルは、ハマスの奇襲攻撃を宣言布告としてとらえた。私が代弁すると、(ハマスが無条件降伏するまで、許さん！ハマスを支援するガザ地区のパレスチナ人たちも、同じ穴のムジナだ)

人質がとられたことで、イスラエルとしては戦いにくくなった。しかし、これでイスラエルは、人質救出のためという大義を持つことになった。(ハマスをせん滅*1させずにはおくものか)と激高したことだろう。

2024年1月になっても、人質の約130人が解放されていない。イスラエルがハマスの要求を突っぱねている状況がある。

*1、せん滅……敵を皆殺しにして滅ぼすこと

3. 病院爆破事件

10月17日の病院の爆発は、500人近い死亡者

が出て大惨事となった。すぐに「イスラエル軍の空爆によるもの」との説が広まった。しかし、イスラエルおよび西側の国がじっくり状況を見て分析したところ、ハマスの側、空爆の可能性が高いことが分かった。

誤爆としても、たまたま病院に当たってしまったのは、首を傾げなければならぬ。ある中東情勢の専門家は、ときどきハマスは戦術として自爆的なことを実行する可能性を指摘していた。ハマスは自分たちが被害者であることを強調するため、多少の犠牲はやむを得ないとしたのかもしれない。すぐに「イスラエルの空爆だ」と主張したことも、先手を取る意味があり、国際的な世論を味方につける効果がある。あとから「誤爆じゃないか」と言っても、世論はほとんど変わらない。ハマスのことについて世論を味方につけることは大きい。それが事実だとしても、やはり、これは「戦争の犠牲者に含まれる」べきものだろう。ハマスのやり方が汚い、などとは言っていない。

私は、ハマスの故意による誤爆という説に信ぴょう性を持つ。イスラエルとしては、身に覚えのないことで「罪をなすり付けられた」わけで、手段を選ばないハマスの対する怒りを増したことだろう。

（それなら遠慮なく、空爆説を実証してやれ）とイス

ラエル側の司令官が思ったのだろう。その後、実際に病院や学校、難民キャンプも攻撃の標的になった。

4. ハマスとガザ地区

なぜハマスは「無謀な」奇襲を決行したのか。イスラエルの反撃を考えると、「無理だ」と考えるべきだろう。しかしながら、「窮鼠猫をかむ」行為にうってでた。ハマスはそこまで追い詰められていた、と考えるべきだろう。

ハマスは武装勢力とされている、レバノンのヒズボラ、イエメンのフーシなどとともに、イランに支援された武装組織だ。ただし、ガザ地区のハマスのように自治を行う政権でもあり、住民たちの多くに支持されている。住民たちの代弁者であるとみなせる。

イスラエルとパレスチナは、歴史的に何度か話し合いの場がもたれたが、これで和平はさらに遠のいた、と私はみる。イスラエルの強硬姿勢は、突き崩せそうにない。パレスチナは危機的・絶望的状况にさらに陥りそうだ。

タカ派ネタニヤフ首相の任期中に、行動を起こしたのは、ハマスとしてタイミングが悪い。ネタニヤフはハマスの対して強硬な対応をすることを公約してきた人だろう。ハマスのこと、話の分かる人ではありえ

ない。

5. イスラエルの猛反撃

イスラエルは完全に怒りまくった。「やりやがったな、ハマスのヤロードも。徹底的にたたきつぶしてやる！ ハマスを壊滅させずにおくものか」「ガザに安全なところはない」だと？ 泣き言言うな！ テメーらが仕掛けた戦闘じゃないか！

ネタニヤフ政権は徹底的なハマス掃討作戦を展開する決意をした。イスラエル軍が反撃する番になった。

先ず空からの攻撃で街を破壊し始めた。

それとともに、10月9日には、ガザの封鎖を実施した。ガザに対して、物資の流通、エネルギー、電気・水道を止めるといふ「兵糧攻め」も加えた。ハマスはともかく、一般住民はたまらない。生活・健康・生命が脅かされる事態になった。

ネタニヤフ首相はイスラエル兵士たちにゲキを飛ばしたことだろうー「ハマス拠点が病院の地下にあるってか？ 遠慮なく、丸ごと破壊尽くせ、やつちまえ！ ハマスを何人殺害するかが、テメーらの任務だ、成果を上げてこい！ これは正義の戦いだ！ 正義の鉄拳を打ち下ろせ！」

〈報復は正義だ〉という思いが強いことが、彼らの特

徴の一つかもしれない。先の大戦中のホロコーストにしても、いまだに、存命の関係者を徹底的に追い詰め、裁きをつけることに執念を燃やしている人たちがだ。

「やられたら、やり返す」のが、イスラエルの頑強なポリシーだ。しかも、パレスチナに対して倍返しどころか、10倍返しをしてきたのが、イスラエルだ、パレスチナにとつても、やられたらやり返さなくては、収まりがつかない。やられたままでは、すまない。

「やられたら、やり返す」ことが公正なことだと仮定しても、半分返しにしたい。そうでなければ、数学的に収束しない。10倍返しなどは、もつてのほかだろう。こんなことをするから、ユダヤ人は世界的に嫌われるし、恐れられるのだろう。

6. ハマスとイスラエル軍

ハマスとイスラエル軍では、圧倒的な軍事力の差がある。ハマスが、そのイスラエル側を激怒させたのだから、タダではすまない。イスラエルの首相が、ネタニヤフ氏であることも、ハマスにとつては不都合なことだろう。彼は、これまでの言動から、好戦的な人物として名高いし、彼が首相のときに、イスラエル側が強硬手段に打って出るとは、歴史的にも証明されていることだろう。

イスラエルは、その誇るべき情報網で、つまり監視カメラ映像あるいは諜報活動でハマスの動きを把握していたつもりだったが、虚を突かれた。武装した戦闘員たちがガザ地区からイスラエル領内に大挙して侵入してくるとは、事前に把握できなかった。

でも、ハマスは「イスラエルを怒らせる」ことを目的にしたものだろうから、一連のすばやい攻撃は作戦的に成功したことになる。

激怒したネタニヤフ氏が叫ぶ。「ハマスのヤロームもめ、許さん！ 今度こそ、許さん。叩き潰してやる。ガザ市民の少々の巻き添えはかまわん。テロリストたちを匿^{かくま}うのなら、やっちなまえ。大きな代償を支払わせてやる」

「やつらもハマ스에協力したりして、ほとんどグルだろ。これは戦争だ、空から爆弾やミサイルの雨を降らせてやれ！ 痛めつけた後は、陸上から戦車を繰り出せ！ 地下トンネルをぶつ潰せ」

「地下トンネルにたっぷり海水を入れたれ！ 水攻めだ」

イスラエル軍の容赦ない攻撃に、連日、ガザ地区の人たちの窮状が次々に伝えられる。住民を巻き添えにしての激しい攻撃が加えられた。ガザ地区の電気・水

道・通信までも遮断し、住民の生活を脅かした。ガザ地区にミサイルや砲弾を撃ち込む。空から攻撃する。ガザ市街地の大半を破壊した。

7. パレスチナ人の意地

ハマスは、奇襲すれば、イスラエルから半端ない反撃を食らうことはわかっていたはずだ。それでも一矢を報いたいという思いが強かったとみえる。損得を超越したパレスチナ人の意地を示したものだろう。損得の計算にたけたイスラエルの人々との違いを見せつけられた。

イスラエル軍の空襲、砲撃が苛烈を極める。地上部隊がガザ地区に侵攻し、抵抗する者たちに銃撃する。戦いは、イスラエル軍の一方的な戦況になっている。ハマス側はゲリラ戦術で「ささやかな抵抗」をするだけだ。

ハマスがヨルダン川西岸の暫定自治区の政権ファタハといがみ合ってきたことが、大きな問題点だろう。パレスチナの一つの国としてまともまらない。過激なこととしているから、イスラエルに弾圧される。

ファタハにしてもイスラエルに対抗できていない。イスラエル人たちが、西岸地区でも、パレスチナ人の住居を制限し、実質的に入植地を広げ、パレスチナ人

を圧迫している現状がある。

ファタハのやり方では、いつまでたってもラチが明かない。ファタハは、なまぬるすぎる、とハマスはみただのだろう。「あいつらはオレたちの土地を踏みにじりやがって……」と怒りまくる。

強力なイスラエル軍に対し、ハマスはゲリラ戦を展開し、抵抗をつづけてきた。

ハマスには自己主張の強さがある。どうしても譲れない一線がある。土地に対する執着だろう。

「この土地は代々パレスチナのものだ。もう数千年も前に明け渡して遠方に行っていたようなユダヤ人には渡さない！」

8. ハマスはイスラエルに抵抗してきた

1948年のイスラエル建国以来、この地では、攻撃と報復の合戦が続いている。ハマスの奇襲とイスラエルの苛烈な報復が度々あった。一時的な停戦があっても、また戦闘が勃発する。

今般のハマスの奇襲攻撃は、抵抗運動の一つとも受け取れる。国際的にハマスをテロ組織と決めつけるのは拙速かもしれない。

2021年5月10日から21日までの11日間、同様な戦闘があった。ハマスの攻撃は主にロケット弾

攻撃だったが、パレスチナはイスラエル軍によって「10倍返し」をされた。イスラエル軍のすさまじい空爆などでガザ市街が壊滅的に痛めつけられた。手痛い犠牲を払ったはずなのに、そのときハマスは比較的短期間に停戦にこぎつけたことで、ハマス幹部は「敵に恥をかせることができた」などと言い放ち、ハマスが運営するテレビ局では勝利の歌が流されたことが報道されている。しかし、パレスチナ側の損害は大きく、その後、散発的にロケット弾を放ったりしたから、さらに物理的に窮地に追い込まれることになった。ガザ地区は、その境界に高い壁が築かれ、封鎖されている状態だ。

他国からの支援を受けないと生活さえも成り立たない、じり貧のハマスが、「一矢を報いたい作戦」が今回の奇襲攻撃だったとみることができる。

「懲りない人たちだ。イスラエルの恐ろしさがわかっていない」と、私は半ば、あきれれる。彼らは10倍返しされることを恐れないし、損得計算を度外視している。あくまでも、イスラエルに反抗するつもりだろう。

9. イスラエル軍の攻撃が続く

一般人を待ち添えにしての攻撃で、犠牲者が増えた。

イスラエル軍は、ハマスが乗っているとすれば、病院にも救急車にも、ピンポイントの精密さで爆撃を加えている。イスラエル軍は精密な攻撃ができる軍隊だ。しかし、民間人の犠牲が多い。その攻撃は、パレスチナ人を虐殺しているように、世界の人々の目に映る。ジェノサイドの疑いが浮かび上がっている。

イスラエル、あるいはユダヤ人をあえて一般化して評すると、その恐ろしさ・執念深さは相当なものであることを見せつけられる。

それを知らないかのような大胆な作戦に打って出たのが、怖いもの知らずのハマス、パレスチナ人ということになる。

11月に入って、国連職員が100人以上死亡したことが判明した。驚くべき数字だろう。故意に国連職員を狙って攻撃したかのような数字だ。国連職員が活動している場所をイスラエル側が知らぬはずがない。

ガザ地区には、多くの有能な国連職員が働いていたわけだろうし、イスラエルの攻撃が近づいても、持ち場を離れるわけにはいかなかったのだろう。

10. 人質だった3人を射殺したイスラエル軍
12月中旬、ガザ地区に踏み込んだイスラエル兵士が人質の3人を射殺してしまった。これはまずい。そ

もそも、人質を助け出そうとすることが作戦行動の第一の目的のはずだったから、誤射という言い訳ではすまない。それに加え、イスラエル政府が人質交渉をろくにせず、武力で侵攻を進めた結果だとする政権批判につながる。

人質たちは、おそらくハマスの拠点から逃げ出してきた人たちと思われる。イスラエル兵たちを見て「助かった」と思ったことだろう。それはつかの間の安どであり、イスラエル兵たちはハマスよりずっと狂暴だった。

ヒトは戦闘状態の中では、いくらでも凶暴になれるという例だろう。戦場では、味方を撃ってしまうケースもよくあることなのだが……。「とまれ！ 近づくな！」などと警告したのであるか。そんな警告を発したのに、無視したのなら、やむを得ないところだが、いきなり発砲した疑いがある。とっさに敵と判断したのである。彼らは敵だらけの戦場に踏み込んで、人質が逃げてくる状況を考えていなかった。イスラエル兵士たちには「こんなところで人質がこのこ出てくるはずはない」という思い込みがあったわけだ。

神出鬼没なハマスの戦闘員の影におびえ切っていたから、とも推測される。ガザに侵攻した兵士たちにし

てみれば、周辺の瓦礫と化したビルがれきの陰に敵が潜んでいて、いつ狙い撃ちされるかわからないという緊張と恐怖を抱いていた、と推定されるから、冷静な判断ができなかったものだろう。

人質たちはシャツを脱ぎ（丸腰のまま）、白い布が付いた棒を持っていた。兵士たちの前に出てきた。発砲したイスラエル兵士たちは彼らを「自爆テロ」と誤認識したからという言い訳をしているという。どこに爆発物をつけていたというのか。

イスラエル軍兵士たちに近づいてくるようなパレスチナ人は、自爆テロしかいない、という認識だったわけだ。「武器を手を持っていなくても、爆発物を身に着けているかもしれない」と考えたのだろう。でもそれなら、胴体に爆発物を巻き付けると異様に着ぶくれするから、すぐに区別がつきそうなものだ。民間人の場合、パレスチナ人とイスラエル人の区別がつきにくい状況があったのだろうか。イスラエル兵たちは「なれなれしく近づいてくるパレスチナ人を見たら、自爆テロと思え！」と訓練されていたのだろう。

もし射殺しなければ、そのイスラエル部隊は人質を救出したとして表彰ものだったから、二重に悔しい失策だろう。

11. 殺害した民間人と戦闘員の比率

この戦闘では民間人の巻き添えが目立つ。

イスラエルがパレスチナの戦闘員の殺害に比して民間人の殺害が低いことを誇るように発表した。しかも殺した人が本当に戦闘員だったかは、かなり怪しいから、まともには受け取れない。

民間人の数を低く言いたがる傾向があるのは、どこかの政府でも同じだろう。例えば、日本政府は公式の統計で、沖縄戦（1945年3〜6月）での死亡者数（日本側の総死者数約3カ月の戦闘で日本側の死者は約18万8000人）について、民間人より軍人の数が多かったと強調する。しかし、ほとんど差はない。しかも、現地で徴用され、軍に組み込まれた人々（約2万人が動員された）も多くいたから、分け方によっては逆転する。実質的に、沖縄での民間人の犠牲は多かった。日本側は、そんな頭数だけそろえた弱小兵力で徹底抗戦を目指したことに無理があった。

連合国側としては、沖縄戦は日本本土へ侵攻するための前哨戦だった。当時の沖縄が戦略的に重要な島だったとは私には思えない。ほとんど訓練的な感覚で、連合国の兵士たちは、洞窟に待ち伏せていた者（単に隠れていた者を含む）など、軍民を差別せず徹底的に

殺しまくった。当時、上陸してきた連合国軍と、今回のイスラエル軍はやり方でよく似ている。訓練かどうかは別として……。

2024年1月に入ってイスラエルのハガリ報道官「ガザ北部でハマス戦闘員を約8000人を殺害した」と発表した。イスラエルはそれまで民間人の死者数は戦闘員の2倍の比率だと言っていたから、16000人の民間人を殺したことになる。合計24000人だ。国際的に、戦闘3カ月でガザでの死者数は2万3000人を超えているとされるから、ちょうど計算が合う。

12. イスラエルがパレスチナの地にこだわる
1948年イスラエルが建国を宣言したとき、国連の場で理事会では不成立になったものの、アメリカなどが強い反対派を押し切って総会で承認したことが大きい。イスラエル承認では、アメリカのトルーマン政権が中立的な立場だった国々の票を「裏工作」して切り崩し、強引に取りまとめた。イスラエル本位であり、パレスチナの立場を考えていなかった。強引に引いた国境線のために、そのときだけで80万人のパレスチナ難民が出たとされる。その後のイスラエルの占領や策略によりどんどん増えた。結局、建国承認は拙速だ

つたと言える。〈トルーマン、あなたのせいだ〉それが今日まで紛争が起きる元凶だろう。国際的な問題が後々まで残る決定は間違いだつた、と言わなければならぬ。

イスラエル（ユダヤ人）はこの土地にこだわる。国際的なお墨付きをもらって、建国に伴い、パレスチナの大半を押しつけてこの地に居座つたことになる。こだわりの元は、彼らの宗教だろう。ユダヤ人にとってここは、神が約束してくれた「カナンの地」だといふ。他人が信仰する神をけなすべきではないが、この場合、神の言葉を疑いたい。〈神がほんとにそう言ったの？〉と。

仮定的なことを言うと、そのユダヤ系の財力でアメリカの一区画を買い上げ、アメリカの一州として「イスラエル州」を作ればよかった。それが安住の地になつたと思える。

ハマスを一掃することを口実とし、イスラエル軍は、ガザ地区の北部・南部ともにほとんどすべての建物を徹底的に破壊してきた。人々が再びそこで生活するには困難があるほどだ。その破壊行為には、「この際、ガザ地区を自国領にしたい」というイスラエルの思惑が透けて見える。

それが実現できれば、ハマスの奇襲攻撃は、イスラエルにとつて好都合だったことになる。ヨルダン川西岸とガザ地区は、パレスチナ側の自治区という扱いにとどめ、パレスチナの国家としてイスラエルは認められなかった。今後も、イスラエルはパレスチナを力で抑え込む政策を続けるつもりだろうか。

イスラエルの人が「われわれはいつの世も被害者だ」と思っているなら、おこがましい限りだ。加害者であるという認識を持たなければいけない。パレスチナの地をととの昔に出ていったのに、第二次世界大戦の戦後のどさくさで、アラブ世界の地に割り込むように、自分たちの縄張りを強引に張ってしまった。

イスラエルを建国するにしても、周辺国と特に現住者だったパレスチナ人に、気兼ねしながら、協調すべきだった。肩身の狭い思いをするのが当然なところだろう。そんな謙虚さをみせないところが、問題の一つだろう。

13. イスラエルは国際社会を敵に回した
三か月たっても、イスラエルの攻撃が止まない。ガザの復興への道があるのか、よくわからない。

パレスチナに対する同情する声が世界的に高まったことは確かだ。国際世論を味方につけ、支援の手が差

し伸べられたとしても、パレスチナの犠牲が大きすぎる。

アラブ・イスラム社会が結束し、イスラエルへの反感を強めた。国際的に、イスラエルが嫌われる度が増した。イスラエルとの外交関係を断ち切る、とあからさまに通告する国も出てきている。近年イスラエルと良い関係を築いてきたサウジアラビアさえ、イスラエルに背を向けてきた。

過激派組織らが活動し始めた。ヒズボラ、フーシ派。そして「イスラム国」の復活の動きがある。

イスラエル寄りとされるアメリカ国内でも、政府がイスラエル支援することに反発が出ている。

西側諸国においても、反シオニズム、反ユダヤ主義 (Anti-Semitism) の風潮が盛り返しそうだ。

ヨーロッパでは、歴史的に各地に反ユダヤ主義 (偏見的・差別的とされる) の感情が根を張っていたが、この戦闘によってそれが再び芽生える兆しがある。つまりヨーロッパの各地にいるユダヤ人が嫌われて、迫害されるかもしれない。(十倍返しをする危険な人たち)として白い目で見られそうだ。

ハマ스에怒りまくったイスラエルのネタニヤフ政権の攻撃的ふるまいが、一番の問題だろう。ネタニヤフ

首相はヒトラーともたとえられ、悪名においてロシアのプーチンと肩を並べた感がある。

ハマスの奇襲にあつて、イスラエルは冷静な対応が取れなかった、と私は結論付けたい。被害者の立場として国際社会にアピールし、国連などでハマス討伐の大義名分を得られてからでも、遅くはなかった。

② エホバの証人の悪評ふんぶん

【毎日新聞朝刊 2023/1/11 社会・声を聞いて宗教2世小学生から伝道、教義で恋愛は罪とされた。「エホバの証人」元2世信者。】

【毎日新聞夕刊 2023/2/28 総合・社会

エホバの証人、児童虐待、鞭が体を打つしつけが一部の信者家庭で行われていたとの指摘がある。】

【毎日新聞朝刊 2023/4/6 社会・宗教2世
息子を叩いた痛みもエホバが承認。むち打ちは愛と教えられた。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/29 総合・社会

エホバ元信者たち、「ムチ」を受けたと証言するものが多数いる。教団が虐待を認めないことに反発。「言うことを聞かない子は親がたたけ」と幹部たちが話し

ていた。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/21 社会

エホバの証人、元2世信者らの調査で、信者の子が92%体験。弁護側「組織的に関与」

元信者の女性「幹部指導で母の虐待が激化した」、別の幹部「学校行事と集会が重なったら、集会を優先しなさい。学校行事にハルマゲドンが来たらどうしますか」】

【毎日新聞朝刊 2023/11/29 社会

エホバ元信者調査、性被害159人。35人は未成年時に性暴力。】

このところ、宗教に対する世間の目が厳しい。統一教会に家計の大半を吸い上げられて極貧生活を強いられた家族の悲劇があったことが、一番大きい。その次に問題視される宗派が、エホバの証人だろう。

熱心な信者の親に育てられた子どもたちが、宗教2世と呼ばれている。親が信者なら、その子どもも感化されて信者になるケースがあると思うが、親たちや宗教団体の幹部たちの言動を冷静にみられるのも2世たちの特権だろう。親たちのあやしいふるまいを身近に見て「こんなでたらめな宗教、信用できない！」など

と反発ケースが多くあるわけだ。親が熱心な信者であることで、苦勞させられた人たちだ。

エホバの証人の信者の親が子どもに鞭を打つことが知られ、世間的に「なんてひどいこと、するんだ」という批判が起きている。新聞などは「宗教2世」の社会問題の一つとして取り上げ、キャンペーンを張ったりしている。

エホバの証人は、輸血を禁じたりして、医療面でのあつれきを起こして、以前から評判が悪かった。布教を信者たちにやらせていること（信者たちが街頭に立ったり、個別訪問したりしている）に、私は引っかけか。前掲の記事にも「小学生から伝道した」という証言がある。マルチ商法的なやり方だろう。私は（布教するなら、幹部自身がやれ！ テメーたちの一番の仕事だろ）と言いたい。教団がハルマゲドンという脅し文句を使うことも、怪しい限りだ。さらに、子どもを鞭打つことが一番の悪評だろう。

しかし、むち打ちに関しては、それなりの理由があるようで、現代の「甘やかし風潮」に対して一石を投じるものだろう。子どもをどう教育すべきかの、一つの選択肢だろう。むち打ちが模範解答とは言えないにしても、一考すべきことだ。子どもが悪いことをして、

言葉で言ってもやめない場合など、体罰をするしかない。声を張り上げて注意しても、子どもはだいたいきかない。おとなが見て見ぬふりをしたり、放置したりするなら、子どもはどんどんつけあがる。子どもは面白い遊びと考えて、やめようとしないうらう。

エホバ元信者で、性被害159人というのも、多い数値だろう。それは組織内部にしまわれ、今まで明るみに出てこなかった。被害者たちが声を上げにくかったわけだろう。組織の上位の者が、その権力と信頼をカサにして、信徒たちに性的な関係を迫ったと想像できる。そんな人が他人に説教する資格はない。

③ ワクチン接種後の体調急変

【毎日新聞朝刊 2023/3/7 総合・社会】

コロナワクチン接種から3日後に死亡の男性の救済決定に1年以上かかった。遺族「少しでも早く審査を」厚労省は「通常のケースも半年から1年審査にかかる場合がある」、新型コロナウイルスの場合、2月10日時点で死亡30件を含む1622件が認定され、190件が否認、1件が保留となっている。】

【毎日新聞夕刊 2023/5/1 社会】

コロナワクチン接種後発熱や頭痛などの症状が長期的に続く事例が40代女性に多かった。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/6 総合・社会】

NHK報道、新型コロナウイルスのワクチン接種後に亡くなった人の遺族について、感染して亡くなった人の遺族のように放送したことに、BPOは倫理違反があったとする意見書を公表した。NHKは担当職員について「広い意味でコロナ禍で亡くなったことに関わりはないだろうと考えた」と説明していたという。】

【毎日新聞朝刊 2024/1/5 広告】

『コロナワクチンその不都合な真実』日本人が知らない本当の「危険性」アレクサンドラ・アンリオン＝コード著】

1. コロナワクチン

今般のコロナワクチンの開発に関して、基礎研究に貢献した人がノーベル賞をもらったりして、ワクチン接種が大いに奨励されたのだが、接種後に一見健康そうな人が体調を崩し、最悪死亡するケースがいくつかわかってくる。ワクチン接種に起因したものの、あるいはそう推定されるケースだ。

ワクチン接種には、どの種類でも、ぜんぜん効かな

い例があるし、負の作用というべき症例がゼロにはならない。予防や治療のための薬が、病状を悪化させたり死を早めたりすることは、時に起きることは知られていることだろう。つまり、ワクチン接種には、健康を害するというリスクがつきものだ。

コロナワクチンに疑問を持つ研究者は、主流派ではないにせよ、いるのだろう。前掲した新聞広告に示したように、そんな一人が書いた『コロナワクチンその不都合な真実』の本は、センセーショナルだし、そこそこ売れているらしい。人々の中には不都合な真実に関心がある人が多少いる。私は読んでないけれど：

2. ワクチンの副作用

コロナワクチンの接種でも、その疑いのある例が起きていく。前掲の記事にあるように、「2月10日時点で死亡30件を含む1622件が認定された」というのは、意外と多い数だろう。まだ認定されないケースや報告されていないケースが、ほかに多くあるのではないか、と私はにらんでいる。その他の持病などの要因とも重なって、偶然発生したものかもしれないが、その偶然性を見極めるのは、専門医でもなかなか難しそうだ。

ところで、コロナワクチンが1回ではすまないのはどうしてだろうか、と私は疑問を持つてしまう。疑問に思いながらも、結局、急ぎ立てられるかのように、6〜7回も接種を受けた。

そのワクチンの接種で、私も行政が指定した会場に足を運んだ。事前に数枚の問診票に記入し、体調や病歴などを自己申告するのも、煩わしいことだ。会場で接種を受ける前後に、医師・看護師立ち合いのもと、かなり厳格な診察・観察があり、副反応による事故を防ぐ体制が整えられていた。それでも、事故は起きていたことになる。

ワクチン接種直後の死亡は、その状況から、ワクチンが死因となった可能性が高いと、だれでも思うだろう。遺族は、「ワクチンを接種しなければ、あの人は死ななかった」と、強い悔恨の思いを抱くことだろう。死亡にいたらないまでも、体の不調が長期に続く例も見過ごせない。

ワクチン接種は、何かしら、体に負担をかけるものだろう。

健康のためにしたことが、健康を害する原因になったとは、本末転倒なことであり、体調を害した本人や遺族らはやりきれないところがある。病気を予防する

ために人為的に製造したワクチンを、人々が接種会場にわざわざ足を運び、面倒な数々の手続きを経て接種を受けたことが、かえって健康を害する結果を招いてしまつては、とんでもないことなのだ。

3. コロナ関連死？

接種による死亡事故は、コロナ関連死の一例として、みなすべきことかもしれない。コロナの感染が広がる可能性がなければ、ワクチンを接種することもなかったわけだ。

しかし、コロナ感染症で重体になり、死亡するのと、ワクチンを接種して死亡するのでは、大きな差がある。いっしょくたにしては困る。はっきりと区分しなければならぬ。

NHKのニュース番組がそれをやってしまった。コロナワクチン接種直後に死亡した例を取材して紹介した際、女性アナウンサーはコロナ感染症で死亡したと説明を加えた。それを言わせた担当者（ニュース原稿を作成した部局）は、「広い意味でコロナ禍で亡くなったことに変わりはないだろうと考えた」と言い訳をした。NHKはBPO（放送倫理・番組向上機構）に「ウソを放送するな！」などと叱られてしまった。フエイクニュースと判定されたわけだ。担当者たちは、

故意に事実をすり替えただけだから、ジャーナリズムにもとる行為だろう。そんな広い意味で解釈したのは、おそらく政府の意向を忖度したものだだろう。

4・ワクチン接種の長短

ワクチン接種で死亡する事例を一番恐れたのは、製薬会社かもしれない。ワクチン製造者責任を問われることになるし、ワクチンが売れなくなるとは経営的に困るのだ。この時期、政府が言い値でワクチンを買って上げてくれるから、大きなビジネスチャンスだった。特需だった。

政府としては、コロナ拡大を恐れるから、多くの人にワクチンを接種してもらいたい。数カ月で効き目が薄れるなら、周期的な何回でも、ワクチンを接種させたい。接種に関して無料の大盤振る舞いだ。そのため予算なら、いくらでも通せる。政府は国民にワクチン接種を押し進めたいし、その責任かもしれない。だから、ワクチン接種による死亡例など、できれば「悪いうわさ」にしたい。

政府は、ワクチン接種後に亡くなった人の数など、はっきり示さない。主要なメディアも、積極的に取り扱っていない。人々がそれにビビってワクチン接種を控えるようなことになっては、不都合だったわけだ。

3月の報道では、行政がその数の公表をわざと遅らせているような状況を示唆している。接種直後に死んだ場合でも、医療側ははっきりと見解を示さず、認定までが遅々としている状況がある。

コロナが蔓延することは、人々の健康にも、企業の経済活動にも影響するから、絶対、防がなければならなかった。感染を防ぐために大騒ぎした。そのなかで、ワクチン接種後の死亡など小異であって、多少の犠牲はやむを得ない、と考えているのだろう。コロナワクチン接種の死亡者は、ワクチン接種を推進するためには、やむを得ない犠牲なのだろう。しかし、その数が複数あつては、無視するわけにはいかない。

ワクチン接種には、コロナに感染しにくい体になるという期待がある。感染したとしても、症状が軽いというから、うれしい。メリットが大きそうだから、接種による副反応や副作用が出ても、やむを得ないとしたい。

④ 勝ちにくいスポーツ

【毎日新聞朝刊 2023/1/5 一面】

絶対に怒ってはいけないミニバスケットボール大会、

監督が怒号や暴言を吐いたらアウト。「今の子は攻撃的な態度をとると傷つき委縮してしまう」 高圧的な指導が問題となるスポーツの現場。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/6 総合・社会

スポーツを楽しむため怒らない大会は、初めて9年目に元バレーボール日本代表、益子直美さん（57）

益子「レギュラーになってから殴られるのが当たり前だった」

伊達「私は常にエースを狙いに行くようなテニス（攻撃型）だった」】

益子直美さんの「レギュラーになってから殴られるのが当たり前だった」という証言には、あらためて驚かされる。おそらく、小さなミスをしたことで、コーチにどやされる毎日だった。それを複数回やってしまうと、殴られたわけだろう。何度も同じ失敗する姿を見て、怒りまくる鬼コーチとしては、殴る蹴るも指導の一環なのだ。自分の腹いせにもなる。大勢の観客のいる試合でも、容赦しないものだろう。

ライバルに勝つためには、確かに心技体が極限まで求められる。厳しさの中で鍛えられたものが、勝ちあがれるのかもしれない。求道者のような、思いつめた

闘志が必要だろうし、相手を打ち負かそうとする攻撃性が、スポーツで勝つための大きな要素かもしれない。徹底的に受けに回っているのは、引き分けることがあっても、勝てない。その攻撃性が高いゆえにその道を極めた者は、引退後、コーチや監督として若い未熟者の指導に当ることが多い。その指導法が攻撃性を帯びるものらしい。

練習すればするほどうまくなるものだから、上達ぶりに満足しながら、あるいは期待しながら、練習に打ち込む。そして試合で勝つことに、優越感に浸り、喜びを感じる。自分に甘いところがある人ならば、鬼のようなコーチに従うことがよい。鞭打たれながら、指導を受けることが上達の近道だろう。

競技大会や試合で、自分のレベルを知ることができる。武道では、段級の認定試験があるから、それを受けることでも、自分の上達ぶりが分かって、うれしい。思い通りの成果に達しなくとも、次回まで、がんばればいいと自分を励ますことでいいだろう。

その道のトップにでもなれば、栄光をつかみ、周囲からちやほやされ、収入面でも利得もあるだろう。目標を持って、練習が苦痛などと言ってはられない。コーチとしては、もし選手が弱音をはいだりすれば、ぶ

っ飛ばす。

トップを極めるのはほんの一握りの人たちだけであって、大多数は、そこまでは行かない。よく負けることがあっても、たまに勝つだけでうれしい。あるいは、結果はともかく、体を動かしているだけで楽しいという人もいろいろいるだろう。〈オレはトップを目指すわけでもない、スポーツを趣味で楽しむんだ〉と開き直っているものにとつては、スパルタ式指導の鬼コーチが目を光らせ、口も手も出すのでは、邪悪な存在だろう。

スポーツで勝つことは純粹にうれしい。最近の小学校の運動会では、徒競走などで勝つても、ぜんぜん表彰されず、順位の区別もしていないそうだ。勝ち負けにこだわらない「気軽さ」を優先している。その反面、それでは、児童は勝つことの喜びが経験できないので、張り合いがないことになる。子どもには勝つてうれしい経験も必要だろう。運動会は体力勝負の、競技の場でもある。競技を体験させることは、教育的でもある。競技を通じて、できなかったことができるようになっていけば、ささやかな自信がつく。「オレは勉強ができてなくても、走ることは得意なんだ」とひそかな自信をいさぐ。人間社会には、勝ち負け、優劣の差が付きまとうのは、しかたがないことだろうし、興味を持た

せる機会の一つが運動会だろう。

それぞれ、スポーツの楽しみ方がある。一般人には、トップにならなくてもいい、という気楽さがあってもよい。益子さんは、その開き直った一人として、注目されている。

勝ちにこだわる人は、勝ったときだけしか楽しみがない、その道一筋の生活を送る。わき目も振らず、地獄の鬼のようなコーチにどやされながら、高みを目指し、岩だらけの道を歩いている、と私は思いたい。尊敬と侮蔑が入り混じる……。

⑤ 勝てばいいのだ・サッカー予選のダメ試合

【毎日新聞夕刊 2023/12/9 スポーツ】

サッカー女子日本代表が来年のパリオリンピック出場権を懸けたアジア2次予選で前半15分に2点をとった後の約75分間をほぼボール回し（味方同士でパスし合うこと）に費やした。】

スポーツでは、競技する本人も、見ている人々も、勝敗にこだわる。勝敗が決まるまでの、はらはらどきどき感がたまらないのだ。たとえ数時間かかる長い試

合であつても、そのはらはらどきどき感が保たれていれば、観ていられる。

そのはらはらどきどき感が75分間、まったくなかった試合をサッカー女子日本代表チームがやってしまった。サッカーで2点とつてしまえば、勝ちが確定したものだろが、ボール回しばかりやっていたのは、これはもう試合ではなくなつていた。試合時間の大部分において、ボール回しの練習ばかりしていたことになる。その間、相手チームには試合をさせなかつた。

サッカー女子日本代表チームは、一つの勝ち星を得たがために、終了のホイッスルを待つだけの「時間稼ぎ」を延々としていた。相手に反撃のチャンスさえ与えない、ずるさ丸出しの戦略をとつた。サッカーでは、後半の終盤になつて、勝ちを確信したチームが試合終了のホイッスルを待つために、ボール回しをやる場合があるのは、時々ある。しかし、前半の序盤からこれをするとは、試合放棄に等しい行為だろう。「サッカーを冒瀆ぼうとくしている」と言えるかもしれない。

いかにつまらない試合をしたことかは、試合を観ずとも想像できる。これほどひどい試合を見せられたのでは、観客としては「もうこんなセコい試合は見たくない」と憤慨したに違いない。もし私が観戦していた

ら、途中で席を立つた。観客たちは、日本代表チームの次の試合には足を運ばないに違いない。オリンピックの精神にも反するようなチームには、応援する気も起きない。

サッカーではボール回しはルール違反ではないから、文句は言えないところかもしれない。ボール回しも実力のうち、と反論されそうだが、しかし……。

他の、時間制限のあるスポーツでは、時間稼ぎを禁止するルールがあるのが一般的だ。もしも、これが柔道の試合なら、確実に審判から指導が入る。それでも時間稼ぎをしたのなら、ついには負けとされてしまうところだつた。

選手たちにしても、ボール回しをすることは不本意なことだつたらう。やる気をうせてしまった可能性がある。選手たちがやったことは監督の指示によるものだろう。監督は、オリンピック委員会に「なんとしてもオリンピックの出場権をとれ！ そのためにテーマを監督にしたんだ」と圧力をかけられていたのかもしれない。監督がその意向を忖度そんたくした可能性が高い。雇われ監督の悲哀かもしれない。

アジア2次予選といえ、オリンピックの本選に出場するためには、まだ先が長い。こんなところで、気

を抜いていいんだろうか。選手たちには「オリンピックの前哨戦だ。わがチームの実力を見せてつけてやれ！」とハッパをかけるべきところだろう。

せこい戦術をもちいたと言わなければならぬ。オリンピックに参加すればいいというものでもないだろう。正々堂々と勝ち上がってオリンピック出場を決める、と胸を張れるような試合を見せてほしかった。相手がいくら格下の弱小チームであっても、全力でプレーをするのが、礼儀（スポーツマンシップ）というものだろう。オリンピックはスポーツの祭典というより「大金の動く興行」というビジネスになってしまっていることがよくわかる。

⑥ 宝塚のトラの穴

【毎日新聞朝刊 2023/11/22 社会】

宝塚音楽学校、理事長退任へ。卒業生によると、宝塚音楽学校（2年制）では上級生から違反を指摘されると、実際は違反をしていなくても、同期全員で深夜まで謝罪させられる。部外者へ相談すること（外部漏らし）が明らかになれば、上級生に囲まれ、激烈な暴言を浴びせられた。こうした入団以前からの行き過ぎた

規律や指導が問題視されている。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/27 社会】

宝塚は21年に、スタッフ裁量労働制を巡り、労基署の勧告を受けた。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/8 社会】

宝塚歌劇団員急死、遺族側が歌劇団でパワハラ15件あったとする意見書を公表した。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/14 社会】

宝塚、宙組の団員死亡で、識者に聞く。2月に週刊誌が（問題を指摘する）報道していた。団員の死亡は9月。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/24 社会】

宝塚歌劇団は、労働基準監督署から2000年以降に4回は正勧告を受けた。賃金の不払いなど。】

【毎日新聞朝刊 2024/1/10 総合・社会 宝塚歌劇団員死亡・光と闇】

5年前に長時間労働や上司からのパワーハラコメントで心身に不調をきたし退団した演出助手の言い分。公演の稽古に入ると、労働が1日16時間に及んだ。午前中の打ち合わせから、午後2時まで翌日の準備に追われた。しかし数万円の手当のみで、残業代は支払われなかった。先輩演出家の言動にも苦しめられた。ミ

スをすると劇団員の前でも怒鳴られた。「論理的ではなく感情的。机を蹴られた同期もいた」 稽古後の飲み会にも参加を強いられ、ダメ出しが続いた。また、劇団員が金銭的な負担を強いられたことも指摘する。「劇団が決めた予算では、カツラ代など、生徒（劇団員）全員分には足りなかった。生徒たちからの苦情の対応は、つらい仕事だった。その分は生徒の持ち出しになった」】

【毎日新聞夕刊 2024/1/11 特集ワイド

元タカラジェンヌ・東小雪さんの証言…夜通し「お話し合い」、先輩が「爆弾ノック」、外部漏らしは禁止。

（新人たちに）連鎖する宝塚の暴力。】

「トラの穴」とは、プロレスをテーマとした描かれた劇画の中での、プロレスラーの養成機関の名称だった。彼らはそこでスパルタ式の地獄の特訓を受けた。宝塚音楽学校は、トラの穴を連想させる。そして新兵を訓練する軍隊のやり方に似ている。そんなやり方が宝塚の伝統として温存されていたわけだ。

一人の劇団員が自殺したことで、宝塚の厳しい上下関係と労働環境が世に知られることになった。華やかな芸能界の裏の姿を現した。劇団員たちや演出助手な

どのスタッフは、理不尽な圧力（感情的な演出家に怒鳴られてばかり、小さなミスでさえボロクソに言われる）の下にあり、労働環境の面でも不当な扱いを受けていた実態が明らかになった。労働災害が異常に多かったこと（過去十年間で労働災害が90人規模であったとされる）が目立っていた。劇団側は、働くものへの配慮を欠いていたし、労基署に何度も指摘されても、長年無視していた。一人の劇団員の悲劇は、氷山の一角だった。劇団は伝統を守りたかったのだろう。

宝塚の劇団員は、2年間の「宝塚音楽学校」で修行してから、正式な団員として採用される。秘密の花園的な学校だが、それどころではなく、この学校では軍隊のブートキャンプを思わせるスパルタ教育に徹していたことがわかってきた。先輩後輩の序列が厳しく、上級生は下級生に対して絶対の指導権を持つ。体育会系の伝統が息づいている。ここではグループで連帯責任も負わされる。一人が何かで失敗したとき、グループに頭を下げさせながら「すみません」の連呼を大声で長時間言わせるのが伝統となっているという。その学校がいじめの温床だろう。

学校外の人に相談することもできない。掟を破ったことがばれだすると「上級生に囲まれ、激的な暴言

を浴びせられる」ことになるのだから、すさまじい。親しい人に弱音を吐くこともできない。学校外の人に相談することが、なぜいけないのか、私は理解に苦しむ。閉鎖的な環境を保ちたいのだろう。学校で行われていることが世間にバレたら、劇団側にとって大いに不都合なことなんだろう。

卒業後は、正式な劇団員として採用され、それなりの華やかな舞台に立つことができるのだろう。その下地があるから、劇団員として自由な生活（私生活）ができるわけではなく、日程の限られた公演のために、練習に明け暮れなければならない。雇用契約上、給料や休暇など、源団から決められた範囲しかもらえない。個別に契約交渉など、できそうにない。

長時間労働させられても、文句が言えない。結局、サービス残業（ただ働き）になるのだろう。

宝塚に労基署立ち入りは、今回の死亡事件だけでなく、過去にも4回あって、是正勧告されていた。そんな勧告では、全然改まっていなかったことになる。労務管理ができていなかったし、改善しようともしなかったのは旧弊体質が伝統だったのだろう。団員を労働者とはみなしていなかったのかもしれない。

この劇団員は、中間管理職的な身分で、一つのグル

ープをまとめていた。公演の期限が迫る中、出来ないパフォーマンスしかできず、上からの叱咤と、下からの突き上げ、あるいは反抗的態度にあり、板挟みの中で、過労になったために自殺した、と私は理解している。日程がそうとうに切迫していたと思われる。（これでは練習不足だ、期限を守れそうもない。また上司にどやされる、どうしよう〜と、うめくようなつぶやきが聞こえてくる。グループの中の一人だけが足を引っ張っていたのかもしれないが、彼女は連帯責任を負わされる。精神論で押し通せないような、無理な日程を組んだ劇団側に非があるのは明らかだ。

もし現場の実態を知らなかったのならば、経営者がボンクラだったといわなければならない。宝塚歌劇団は、内部の人件費や経費を絞って、しみつたれた経営をしていたことがわかるが、近年、コロナ禍の時はともかく、ファンの根強い支持があったから、それなりの利益を上げ、黒字経営をしていたわけだろう（グループ決算のため、歌劇団だけの数値は不明）。それだから、経営者には労働環境など改善しようとする気が起きなかったのかもしれない。働く者たちに利益を還元せず、自分たちのものにしていただろう。かれらの役員報酬や配当金は、ほとんど役得だろう。

⑦ 私人逮捕系ユーチューバーの空騒ぎ

【毎日新聞朝刊 2023/9/30 くらしナビ】

SNSに「私人逮捕」の動画がめだつ。「やりすぎ」批判も出ている。他人の行為を犯罪と決めつけて拘束する様子を撮影する。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/15 社会】

私人逮捕系ユーチューバー・杉田一明容疑者（40）を逮捕。女性を中傷、名誉棄損の疑い。

帝国劇場付近にいた女性（18）がチケットを転売していると決めつけ、「8万円で売っているよね。お姉さん、パパ活をやっているでしょ」と話しかけ。女性の顔などを映じた動画をユーチューブに投稿した。】

私人逮捕系ユーチューバーが撮影した動画を見るのは、楽しいかもしれない。犯人と思しき人物を無理やり捕まえる一部始終を見ることはめったにないことだろうが、ここでは日常茶飯事だ。

観客たち「おっ、あいつら、また犯人を取り押さえたね、見事なものだ」

私人逮捕系とは、警察や公安の者でもないのに、犯

罪を取り締まる様子が、動画で示される。数カ月前からその暗躍が注目されていた。実は、正義のふりをしているだけの、迷惑系なのだ。彼らにかかつては、普通の人が痴漢やチケット転売人にされてしまう。

前掲記事では、一例を示したが、複数の私人逮捕系ユーチューバーがいて、目に余る活動になっていたから、警察でも取り締まりに出たのだろう。テレビのニュース番組では、彼らが電車の乗客の男性を痴漢と決めつけ、後ろから抱き着き、取り押さえる動画映像が放送されていた。

動画投稿サイト・ユーチューブは、一般の人に動画を投稿させ、多くの人が面白がって、それを再生すること、ビジネスになっている。不特定多数の会員がそれを再生するときに、しっかりと広告を入れている。サイトは広告主からの料金収入で運営している。面白い動画を投稿した者には、その再生回数に比例して、その「分け前」を支払うから、投稿者は、それを励みとして、さらにおもしろおかしい動画を持ち寄ることになる。その報酬目的で、投稿する者も現れる。チャンネル登録の形で特定の視聴者呼び寄せ、人気が集まり、毎回見てもらえることになる。視聴者をつなぎとめるに「演出」が過激にもなる。

私人逮捕系ユーザーたちは、犯行現場に居合わせて、現行犯たちに詰め寄る様子の一部始終を動画にする。しかし、多くのネット上の観客が期待するような動画は、たまたま偶然居合わせて撮影できるもので、めったなことでは「事件」に遭遇できないものだ。

それならば、「事件」をでっちあげてしまえ、とプロデューサー（制作）する企んだのが私人逮捕系のユーザーたちだ。「事件」を起こす者とそれを撮影する者がグルになって、事件の起こりそうな場所に行ろつく。「ここでは、こんな犯罪が起こりえる」と彼らは想定して、出向くのだろう。犯人と思しきものに声を掛ける内容も。事前に考えておくのだろう。

一方的にまくしたて、『犯人』には弁解の余地さえ与えないから、動画を見ている観客たちは、その手際の良さに感心するばかり……。

『犯人』たちは、しばし状況を理解できないから、困惑する。身に覚えのないことで、責め立てられるのだから、たまらない。ようやく自分が犯人と誤解されていることに気づくと、何かの間違いだろうと考え、

「ちがう、オレじゃないと抗う^{あらがう}だけだ。私人逮捕系ユーザーたちの悪意を見抜くのは、自分がユーザーの動画に出ているのを見たときにわかるのかも

しれない。

犯人役にされた人は、演じた分として報酬の一部をもらわないと割が合わない。

⑧ 恋愛のパラサイトたち

【毎日新聞朝刊 2022/8/17 総合・社会

国際ロマンス詐欺急増。ライン数百回、送金後、連絡減る。仮想通貨の投資話に乗ったが、投資した金が取り戻せなくなった。だます側の手口も洗練している。】

【毎日新聞夕刊 2023/9/30 一面

「ルポ・国際ロマンス詐欺」小学館新書が話題だ。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/6 社会

（業者に）弁護士の名義を使わせてロマンス詐欺の被害金回収業務を行わせたとして、RMC法律事務所代表の弁護士らを弁護士法違反（非弁提携）の疑いで逮捕した。（業者は）「回収確実」とする誇大広告を打つことが横行。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/21 社会

大阪弁護士会が、名義貸し疑いの弁護士を弁護士法違反（非弁提携）の疑いで懲戒請求した。（その名義を

借りた業者が）ロマンス詐欺救済をうたい、約1800人から9億円を受領か。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/22 社会】

ホスト料金「ツケ」禁止を、親たちの団体が条例制定の署名運動をする。娘の彼氏は「残り900万円」と言った。日本駆け込み寺へ相談した女性（母親）の娘は、9月彼氏のはずだったホストから「おまえとは二度と会わない。気持ち悪い」と言われたと、泣きじゃくりながら、知らせてきた。母親は娘との関係に今も悩んでいる。】

【毎日新聞夕刊 2023/12/4 特集ワイド】

ホストクラブ激増の歌舞伎町。姫からめとるカネの鎖、恋心につけ込むつけ払い、合法的な裏社会。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/6 社会】

歌舞伎町で、1月から段階的に減らし、来年4月にホスト店でのつけ払いを撤廃すると、経営者らが表明した。悪質営業多発、初の改善策。客の未払い分は個々のホストに肩代わりさせる形にしていたがやめる。ホストは正体を明かさず接触し、恋愛感情をほめかす。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/7 総合・社会】

武見敬三厚労相は、女性客に支払い能力を超えた料金

を請求し、高額な借金を負わせる悪質なホストクラブについて「とんでもないやつら」と述べた。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/20 社会】

警視庁が歌舞伎町を調査。ホスト店（ホストクラブ、メンズコンセプトカフェ）の計347店が立ち入りの対象となり、調査した202店のうち7割に当たる145店で、料金を明示しないなどの風営法に違反する行為が確認された。】

【毎日新聞夕刊 2023/12/20 社会】

東京・歌舞伎町9〜12月中旬、路上売春疑い95人を逮捕。売春防止法違反（客待ち）容疑。ホストクラブやコンセプトカフェでの遊行費を稼ぐ目的の女性が多い。つけ払いの売掛金の返済のために売春を始めたケースも確認されたという。】

女性は恋愛に一途な面がある。結婚願望の強い人もいる。出会いによって恋心が心の奥で燃え盛る……。恋の病は一種の熱病なのだ。ただし、男にしてもストーカーとして付きまತ್ತたりするから、どっちもどっちなのかもしれない。

古来より、女に貢がせて生活する男たちがいる。例えば、髪結いの亭主がよく知られている。そんな男た

ちの遺伝子は、子孫に引き継がれるものだろう。現代では、ホストとして職業（プロフェッショナル）になっている。ホストは基本的にカネを目的とする。そんな男たちは、ビジネスに徹しているけれど、娘は恋愛と思いはめる。

・国際的なロマンス詐欺の暗躍

そして結婚詐欺師がいる。近年は、国際的に活動範囲を広げており、彼らは異国の富裕な女性たちを口説く。ロマンス詐欺と呼ばれている。

日本の女性たちは欧米の、特に白人男性にあこがれを持つから、SNSなどの通信機能を利用し、欧米に有名都市に在住しているなどと騙り、白人のふりをしている。言い寄ってくる。頃を見計らって、カネを無心することになる。「とりあえず、資金を建て替えてくれなにか」などと、カネの話をする。最初は小銭程度の金額かもしれないが、それがエスカレートし、高額の出費を要求するようになるのが、かれらの手口なのだ。

時には投資に誘い込む。あるいはマイホーム資金として高額な住宅ローンを組ませたりする。その場合、詐欺師たちは不動産業者とグルになっている。

しかし、〈カネの切れ目は縁の切れ目〉「金の貸し借りは、友達をなくす」などの譬えがあるように、金

銭問題に発展する。（貸した金など、戻るわけがない）という結末になる。結局、彼らは自分が食べていく以上の収入を得て、優雅に暮らせる身分となる。

そんな詐欺師たちの遺伝子は、別なところに残されるのだろう。

詐欺に引っかけた被害者たちは、出費・出資したカネを何とか回収しようと躍起となるものだ。そこに目をつけたのが、「回収確実」と広告にうたう業者たちだ。振込先の口座を凍結することも可能だなどとうそぶく。ちゃんとした弁護士の名前も掲げられているから、ワラをもつかむ思いで依頼してしまうのだが、業者はそのための手数料として被害者たちに前金を支払わせる。裁判費用などを上乗せするから、少なくとも金額だろう。しかし、しばらくして「回収不能でした」との結果を知らせるだけで、実際は何もしない。「相手との連絡も取れなかった」と言い訳するのだろう。弁護士資格もない業者だから、回収できるわけない。名前を出した弁護士本人は何もしない、名前を貸しただけなのだ。それは違反になるのだが、儲けが大きい。あやしい業者からのカネだから、遠慮はいらないのだろう。被害者たちは二重に被害を受けることになるのだから、腹立たしいし、悲しい。

・歌舞伎町のホストたち

昔から、東京・新宿歌舞伎町は歓楽街として有名だ。ぼったくる（高額な料金を請求する）店があることで知られている。そんな店は店員たちが道を歩く人を呼び込む「客引き行為」をするとされる。

近年、ホスト店が増え、ホストたちのたまり場になっているという。このホストがパラサイト的だ。女性の心をつかんで、カネを取り上げる。そして路上で客待ちをする女性たちの多さが目立ってきた。

最近のホストたちは、かつてのようにセレブな女性客を相手に酒を飲んで楽しくさせるのではなく、若い女性に恋愛感情を抱かせることに執心する。出会の場ではホストという身分を明かさないと。ホストクラブ、あるいはコンセプトカフェに入り浸りにし、ツケで飲み食いし、あとで高額なカネを支払わせることが手口だ。

「支払えなければ、金融業者からカネを借りてでも工面しろ！ それでも足らなければ、歌舞伎町の路頭で客待ち（売春）しろ！」と、鬼のような顔で迫る。自分の彼女を売春させる彼氏の本当の顔に、その一端を見せ始めても、女性たちはなかなか気づかない。（これは恋愛ではない）と気づくのはいつのことやら。

女に貢がせる男たちに、だれもがなれるものではなく、巧妙な手口を知っていることやいくつかの才能が必要だろう。演技力、会話能力を發揮する必要がある。そうだし、美男であるより、むしろ見た目がさわやかで、礼儀正しいことが好まれるものだ。基本的に、だれからも好かれるタイプだろう。つまり、あなたが人に嫌われるタイプならば、たとえいくら勉強ができて、ホストにはなれない。

⑨ 違法薬物と禁断のグミ

【毎日新聞朝刊 2023/8/9 スポーツ、社会】

日大、言い訳？説明に終始、部内処分で「学生に配慮」
林理事長らが会見。日大は違法薬物の確証がなく、通報が遅れたとする。隠蔽を否定。】

【毎日新聞朝刊 2023/10/20 社会】

日大アメフト部、大麻疑い 11人、学内会議で報告。
林理事長「副学長（沢田康広氏）はお引きなされたほうがいい」】

【毎日新聞朝刊 2023/11/16 社会】

祭り配布のグミを食べ、嘔吐の5人が搬送された。
グミ（10粒7000円）のパッケージには、大阪に

ある会社の名前と大麻由来の成分と構造の似た合成化合物が含まれていると書かれていた。墨田区の押上駅でも4人が搬送された。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/17 社会

大麻グミの成分HHC(H(ヘキサヒドロカンナビヘキソール)を指定薬物にする、厚労省方針。大麻グミで体調不良が相次ぐ。ただ、大麻由来成分のCBD(カンナビジオール)については、武見敬三厚生労働相は、新たな規制の対象にはならないとの認識を示した。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/18 社会

最高裁判決、出演者の不祥事(薬物事件)があつた映画への助成金不交付は違法とし、公益侵害に当たらないとした。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/20 社会

厚労省は、体調不良を引き起こしたグミに含まれていた大麻類似成分を22日にも指定薬物にする。都内で11月に騒動が3件あり、計11人が搬送された。大阪府でも十数人が搬送された。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/22 総合・社会

厚労省は大麻類似成分HHC(H)を指定薬物に追加を承認、大麻由来の違法成分のTHCと構造が似ている。包括指定も検討。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/3 社会

大麻グミ(HHC(H入り) 2粒で体調急変。

厚労省は22年3月にHHC、23年8月にTHC(Hと、THCに似た合成化合物を指定薬物に指定している。2024年1月にも包括指定にする方針。】

【毎日新聞夕刊 2023/12/16 憂楽帳

サンフランシスコでは薬物の過剰摂取が深刻だ。大半は合成麻薬「フェンタニル」の乱用が原因だ。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/20 総合・社会

今年1〜6月、麻薬に似た成分を含む市販薬の過剰摂取で5600件救急搬送されたことが、消防庁と厚生労働省の調査で明らかになった。若年層を中心に搬送件数は増加傾向にある。】

1. 薬物

よくわからないものにも手を出すのは若者の特権だろう。よくわからなくても、それで何かしらの安らぎが得られれば、カネに代えがたいものになる。それがヒトの弱さの一つかもしれない。法的な規制がかかるのも仕方がない。

年齢を重ねると、大人は怪しいものにはこわくて手を出さない。新奇なものに対して抵抗を持つ。保守的

なのだ。

若者は、好奇心があつて、平気で試してしまうものだろう。気分の悪さを少しでも和らげてくれるなら、薬をもすがつつもりで、服用してみる若者もいるだろう。イライラの多い世の中で、気分がすぐれず、不安感でいっぱい若者たちの中には、たとえそれが高価であっても、試してみようと思つてしまう。「違法かどうかは、大人の都合で押し付けたもの。いいものかもしれない」という誘惑のささやきが聞こえてきたりして。

日大アメフト部の薬物騒動では、大学側の対応の甘さが問題視された。アメフト部の寮内で、部員の一人が大麻を持つていたことが大学側の調査で判明したのに、対応した副学長が、その事実を握りつぶそうとした疑いがあった。一人だけなら、大目に見ようという配慮(親心?)があつたとみえる。もし公表したなら、マスコミが大騒ぎし、不祥事になるから「大学の名誉」にかかわることでは困るから、隠ぺいする気持ちが働いたわけだろう。

ところが、一人だけではなかったこと(大麻疑い1人)が判明したのは、大学側の大きな誤算だろう。その後の警察の調査で、寮内で大麻が蔓延しているこ

とが分かった。大麻中毒を心配した告発者が、大学ではらちが明かないとみて、警察に知らせたのだという。

世の中は、大麻に寛容ではないわけだ。

大学はアメフト部を廃部にするなど厳しい対応せざるをえなくなった。理事長は、記者会見で矢面やおもてに立たされたし、アメフト部の不始末のため文科省からの私学助成金を今年ももらえなかったことが大きい。年約90億円が3年連続もらえなかった。

2、あやしいグミ

問題のグミにしても、包装紙にHHCHと大書されていた。「なんだ、その薬物は？」と引けてしまうのが大人だろう。それらは値段が高いことも、手が出ない理由だろう。でも、はじめのうちは、試作品としてただで分けてくれる売人もいるらしい。日大アメフト部の部員の一人は「おまけ」としてもらったものもある、と証言していた。「おまけ」は拡販のための販促品、あるいは試供品だから、つい、つられてしまう。ダダより高いものはないことに気づかない。

あやしいグミやビスケットを食べ、体調がおかしくなつて救急搬送された事件が相次いだ。祭りでは配布(おそらく、タダで配布されたもの)のグミにはHHC Hが入っていた。それは大麻に似た分子構造を持つ

合成薬物で、服用すればそれに似た作用とともに、体調が激変する副作用があったわけだ。人によって作用が異なるかもしれないけれど、毒物的な作用をすると言わなければならぬ。そんな作用があれば、大麻取締法に違反しなくとも、食品としての安全性に問題があることになるから、製造販売する業者の責任が問われよう。

HHCHの場合、それまで規制の対象にはなっていない。製造や商取引に関して違法じゃなかったわけだろう。それによる救急搬送が報道されるようになって、あわてて厚労省は、規制の対象にした。大麻に似た分子構造なら、一部の構造を変えただけのものが、他に何種類も考えられ、それなりの製造技術を持つ業者なら合成できるから、また規制を逃れた、新たな薬物が出まわるかもしれない。類似の合成化合物がでても、考えるられるから、包括的な指定をしなければならぬところだ。一つ一つの合成物を規制するのではなく、ひとまとめに（包括的に）規制することが政府に求められている。厚労省が「指定薬物」にする規制について、いつも後手に回っているから、問題が拡大する。

3, オーバードーズ

そんな怪しい薬物でなくて、一般の市販薬でもオーバードーズ（過剰服用）すれば、その成分の副作用として麻薬効果があることを一部の若者の間で知れ渡っているらしい。処方箋なしで買える市販薬でそんな副作用が起きることを一人が発見すれば、すぐに仲間たちに伝わるのが若者たちだ。

そのオーバードーズでの救急搬送が半年で5600件あったとは、信じられない数だ。これでは、そのうち死者も出るだろう。

若い人が大量に市販薬を買ってくれば、それを販売する店は、売り上げが伸びるからうれいことだろう。オーバードーズ防止のために規制するにしても、薬局側のモラルに期待するのは、限界がありそうだ。

⑩ ネバダ大学銃撃事件

【毎日新聞夕刊 2023/12/9 総合】

米ネバダ大ラスベガス校で12月6日、銃撃事件があり、3人死亡。教授の男性（64）、准教授の女性（39）と日本人の准教授タケマル・ナオコさん（69）、その他1人が負傷。

容疑者は別の大学の元教授の男性（67）、駆けつけ

た警官に銃で撃たれ、その場で死亡が確認された。男性の遺体から「標的リスト」のようなものが見つかったが、被害者の名は含まれていなかった。CNNは、男性はネバダ州で教員関係の求人に応募したものの採用されず、金銭的に苦しかったようだと言えた。」

やけくそ（自暴自棄）になった元教授の男がネバダ大学の構内に侵入し、不特定の教職員たちに向けて銃を撃った。自己防衛のために銃の所持が許可されているものなのに、無関係な人々を殺傷したのは誤用極まりないことだし、銃の使い方がわかっていない人のすることだろう。元教授ともあろうものが銃撃事件を起こすなんて、みっともない限りだ。67歳という年齢で、晩節を汚したことになる。死ぬにしても、一番見苦しい行動だろう。

そんなことをすれば、アメリカでは無条件に警官に銃殺されるに決まっている。破滅への道に自ら飛び込んだことになる。銃撃事件に接して、やはり銃は攻撃用の武器であり、その危険性を再認識させられる。

日本でも、タケマル・ナオコさん（69）の不慮の死で、それまで業績や人柄をしのぶ声が大きいの。

この男がどうしてやけくそになったかは、（ネバダ

大学に教職員として採用されなかったから」と示されている。経済的に苦境にあつて、教職員に採用されないと生活できないという切迫感があり、追い詰められていたのかもしれない。その他の要因もあつたろう。家族関係の悪化（例えば、離婚したとか）や、投資やギャンブルなどで失敗し、借金などしていたことが背景にあつたかもしれない。

しかし、教授や准教授らを射殺したところで、何になるんだらう。彼らのその地位をうらやましいと思つたのらうか。単に、やつかんだと解される。

……（自分は採用されず、彼らが採用されたのは何なんだ？）

教職以外の仕事の口があつたとしても、職種が限定されるのらう。老体の身で安い給料ででき使われるのでは、自分のプライドが許さなかつた。もう自分の将来はないと思つた。ふと、「そこに銃があること」に彼は気付く。

（そうだ、やつらを道連れにしてやれ！ 彼らにうらみはないが、地獄への道連れにしようどい）

彼は自分が採用されなかつたネバダ大学にのりこんだ、銃を隠し持って……

破滅的なヤケクソ行動をとるような人が教職員に採

用されないのは、当然だろう。採用担当者は、人を見ることがあったらというべきだろう。

⑪ バイデン大統領・大丈夫か？

【毎日新聞夕刊 2021/3/19 総合

ロシアのプーチン大統領は18日、バイデン米大統領が「プーチン氏を人殺しと思うか」との米メディアの質問に「そう思う」と肯定したことについて、「お大事に。彼の健康を願う。これは皮肉でも冗談でもない」と述べた。】

【毎日新聞夕刊 2022/2/25 一面

バイデン氏、ウクライナ侵攻のロシアへの輸出規制を強化へ「プーチンは侵略者」】

【毎日新聞朝刊 2022/3/20 総合

バイデン氏がプーチン氏を「独裁者、チンピラ、戦争犯罪人」とこき下ろした。】

【毎日新聞夕刊 2023/5/22 総合

バイデン氏が「岸田大統領」と2度言い間違い。】

【毎日新聞朝刊 2023/6/22 国際
バイデン氏が選挙イベントの演説中「習氏は独裁者」と発言。中国は反発。】

【毎日新聞夕刊 2023/8/12 総合

バイデン氏10日、ユタ州の集会の演説で、「中国は時限爆弾だ」と述べた。「悪い人たちが問題を抱える」と、悪いことをする」と言い放った。】

【毎日新聞夕刊 2023/9/15 NewsFlash

バイデン氏の次男ハンター氏、銃不法所持で起訴。薬物の依存症を隠して銃を購入した。】

【毎日新聞夕刊 2023/11/22 近事片々

81歳を迎えたバイデン米大統領が演説で著名歌手の名前を言い間違える。】

【毎日新聞夕刊 2023/12/6 NewsFlash

トランプ氏の出馬（大統領選への意志表明）でバイデン氏が決意「彼を勝たせるわけにはいかない」】

【毎日新聞朝刊 2023/12/10 社会

米ネバダ大学で銃撃事件、3人死亡。日本人准教授タケマル・ナオコさん（69）が含まれる。容疑者は別の大学の元教授（67）だった。CNNによると、今年は学校で80件発生しており、2008年以降で最多となった。バイデン大統領は2日後の12月8日、インフラ投資イベントの演説で、多発する銃による事件に触れ、「これは正常ではなく、決して正常にしてはいけない」と、銃規制の強化の必要性を訴えた。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/13 総合】

バイデン氏、ガザに侵攻するイスラエルに苦言「世界の支持を失う」】

【毎日新聞朝刊 2023/12/22 国際】

81歳の誕生日と重なった「恩赦式」にホワイトハウスで演説したバイデン氏は、「60歳になるのは難儀だよ」

歌手のテイラー・スウィフトさんをブリトニー・スピアーズさんと言い間違えた。】

【毎日新聞朝刊 2024/1/8 国際】

アメリカ、オースチン国防長官が1月1日に入院したことが、4日になってバイデン大統領に報告された。バイデン氏は、報告の遅れたオースチン氏に対して処分を否定した。】

アメリカのバイデン大統領の健康面で、多くの人が心配している。アメリカ大統領は、大国のトップとして重大な職務を抱え、忙しい。大統領の職は、体力を要求するものだろう。国内の各地で演説する機会がたくさんあり、外交で世界のあちこちを飛び回る必要もある。

体力より認識力・判断力という頭脳の働きがまとも

なら、老体でもいいかもしれない。しかしながら、人間は、基礎的な体力が落ちれば、気力や知力も怪しくなる。

自分では体力・気力・知力が落ちていることに気づきにくい。自分はまだやれるという自信を持つことは、悪くはないが、自分の衰えを認めたくない一面もあるだろう。

引用の記事に、バイデン氏が自分の年齢を60歳と言った発言があるが、これはユーモアのつもりであって、わざとだろう。

独裁色の強いトランプ氏より、良識的に見えるバイデン氏は大統領としてマシなので、私は肩を持ちたいところだが、バイデン氏は、あぶなっかしい面を見せて始めている。知力の面でも、言い間違いなど小さなミスが多くなってきている。小さなミスは大きなミスにつながりやすい。体力的な面では、ライバルのトランプ氏に明らかに劣っているようだ。

バイデン氏が他国の首脳を批判した記事がいくつかある。数年前からのものだが、的を射ており、私もそう思う。政治家が自分の意見をはっきり言うのは好ましい。ただし、こざかしい優等生外交官なら、決して口にしないことばかりだ。外交上、首脳の悪口を言う

のは、国家間であつれきが生じたりするから、一般には避けるところだ。悪口をはつきり言つてしまうと、相手を怒らせてしまう。

(次期大統領選で)「トランプに負けるわけにはいかない」といったのは、まだ氣力が充実しているからだろう。

(ウクライナ侵攻での戦闘において)「プーチンに勝たせるわけにはいかない」

(イスラエルのガザ侵攻でネタニヤフ首相に)「イスラエルは世界の支持を失う」

この意気込みや、率直な物言いがすばらしい。特に、ウクライナの土地をロシア領にしたがる「ロシア皇帝プーチン」の野望をアメリカの力で打ち砕いてほしい、と私は思う。戦闘に介入して直接的な利益は、アメリカにないかもしれない。ウクライナを支援するために国家予算を費やす意味があるか、むしろ戦闘を止めるべきではないかと問われると、アメリカ国民の多くを説得させるだけの論拠は乏しいだろう。世界正義のためという、おおまかな概念で説くしかない。アメリカやその他の国からの武器供与が止まれば、ウクライナは苦渋の妥協をするしかない。

バイデン氏の次男ハンター氏の不祥事で、バイデン

氏も関係しているらしく、バイデン氏本人にも批判が向けられた。不肖の息子のせいと、騒がれ、比較的大きなニュースとして扱われていた。息子が銃の不法所持で起訴されたのでは、立つ瀬がない。そもそもバイデン氏は銃の規制を呼びかけていたはずだから、その説得力に欠ける。バイデン大統領がいくら銃規制を訴えても、その権限が及ばないことに、アメリカでの銃規制の難しさがある。(このことは別途推敲したい)

また、1月1日に入院したことの報告が遅れたオースチン国防長官に対してバイデン氏はへんに寛大だったが、トランプ氏なら「おまえはクビだ!」とすぐに言いそうところだ。オースチン氏自身のせいというより、それぞれの側近が怠慢だったか。バイデン氏をサポートする閣僚や側近がしっかりしていないのか、という懸念が生じる。オースチン氏の病氣(前立腺がん)が個人的なこととして配慮があつたらしい。

⑫ 学校給食業者の苦境

【毎日新聞夕刊 2023/9/7 総合・社会

給食を提供したり食堂を運営したりしていた広島県中区の「ホーコー」が食事の提供を停止した。全国約1

50施設での食事にかかわっていたが経営悪化。負債を抱えていた。」

【毎日新聞夕刊 2023/11/1 社会】

川崎の学校給食、相模原の食品会社「寿食品」が豚肉を国産と偽造。会社側は市教委に対し、「10年以上前から安価な外国産の豚肉を混ぜていた」

市教委が9月に実施した学校給食の産地に関する抜き打ち検査を行い「カナダ産」と推定される結果が出た。

市教委「誠に遺憾。児童と生徒には不安な思いをさせてしまった」

【毎日新聞朝刊 2023/11/2 社会】

神奈川県警が、給食豚肉を国産に産地偽装の会社を捜索。」

【毎日新聞朝刊 2023/11/9 社会】

東京オリンピック・パラリンピックの選手村への豚肉納入を巡り、農水省が架空の契約書を作成したことを、検査院が指摘した。農水省は国産食材を提供して日本の魅力を発信するとの方針に基づき、契約済みの外国産豚肉11トンの調達計画を見直すことに決めた。」

【毎日新聞朝刊 2023/11/18 神奈川】

川崎市などの小中学校の給食で使用された豚肉を国産と偽って外国産を納入していた「寿食品」が食肉事業

から撤退（本年11月15日で廃業）を決めたことが判明した。」

【毎日新聞夕刊 2023/11/24 総合】

給食業者の倒産、2年連続増。安い受注額、物価高も重荷。ホーコー（広島市）経営破綻、給食事業者の倒産が今年に入り17件（10月時点）。コスト上昇分を価格に反映できないケースが目立つ。」

給食を提供する業者の経営は、どこでもきびしいようだ。昨今、食材や諸経費がどんどん値上がりしているのに、学校側に給食費を容易に上げてもらえない現状がある。給食費はぎりぎりの価格に抑えられているのだろう。抑制されている要因の一つは、教育委員会が取り仕切っているためだろう。

「ホーコー」の場合、9月にいきなり給食の提供を止めてしまった。これは迷惑な話だ。広域的に事業を展開していた業者だから、影響は大きかった。やはり食材の値上がりのために採算が取れず、資金的に行き詰まったのだろう。経営破たんは、前もって公言できないものらしいが、教育施設に提供する業者として社会的なモラルに欠ける。

そして「寿食品」の場合、豚肉を国産と偽ったこと

で、叩かれた。豚肉の産地を偽称したことで警察まで動き出した。

市教委は長年、児童・生徒に外国産豚肉を食べさせたことに、へんな責任を感じているようだ。そして業者に対して「給食に安い肉を使うな！」と怒っている。

「豚肉は国産に限る」と指定していたわけだ。

それにしても、給食に出される豚肉の産地にまでこだわるのが、市教委の仕事だろうか。それは給食担当の栄養士の仕事と考える。市場価格を考慮せず、どうでもよいことにこだわるのが市教委であるらしい。栄養や衛生管理面で口を出すのならともかく、食材の産地に口を出すのは余計だろう。

結果的に、市教委は給食業者をいじめるようなことをしている。川崎の学校給食で市教委が、抜き打ち検査までやってカナダ産であることを突き止めた。

しかし、国産肉である必要があるのだろうか。国産肉と外国産肉で、どんな違いがあるのだろうか。成分や栄養価などではっきりした違いがあるのだろうか。

調理してしまえば、さらに区別はつきにくいから、私はどっちでもよいことだと思う。違いとして大きいのはその価格だろう。このところ円安が進んでいるけれど、いくら円安が進んでも、まだ外国産のほうが安

いのだろう。

「国産豚肉」が一つのブランドになっている。生産者が商品を高く売りつけるには、ブランド化すればよい。行政もそれを後押ししている。結局、外国産を差別することになる。そして児童・生徒に、値段が高いだけの「高級豚肉」を食べさせる必要があるのだろうか。私は、食べ盛りの子どもたちには質より量を重んじたい。安いものなら、同じ値段でたくさん食べられるはずだ。

その業者が扱ったのはカナダ産だったわけだが、国産豚肉かカナダ産豚肉かは微妙な違いだろう。長年、見分けられなかった。精密な分析をしないと区分できないのが現状だろう。今回、わざわざDNA解析をして、判別したという。

国内生産者は「国産肉の方がうまい」と思わせることで、消費者に高く買ってもらっている。でも、それは「高級肉はうまいだろう」という思い込みによるところが大きい。だいたい、口の中の味覚はいい加減なものだ。

「国産なら安心」という根拠も怪しい。それは思い込みだろう。外国産に対する偏見だろう。外国産なら、入管で検査があるけれど、国産の場合、そんな厳密な検査もなく、見た目（ラベルを含む）で、取引業者の

間で馴合い的に流通してしまうから、むしろ怪しい。

見分けがつきにくいことに目をつけて、給食業者は、高い国産豚肉の代わりに、安いカナダ産を使って給食費を安く抑えていたわけだ。それは企業努力の一つというものだろう。給食費を安くするためには、外国産のほうがよかったのだろう。業者にも、給食費を支払う側にも、メリットがある工夫だった。

給食業者「インフレの中、少しでも安く提供しようとしているオレたちの努力をアイツらが台無しにしやがって、この商売は止めだ！ もう、やってられない。会社をすぐたたんでしまおう。児童生徒と〇〇県人には、豚のエサでも食わせておけ！」 鬱憤をつのらせた業者たちの怒りの声が、私の耳に聞こえてくる。

それに、2021年7〜9月に開催された東京オリンピック・パラリンピックの選手村の選手たちから、「こんな油っぽい、まぜい豚肉を食わせやがって、どこから調達したんだ？ えっ、日本産？ やっぱりなオレはカナダ産を食べたかったよ」と不平不満の声が時空を超えて私の耳に聞こえてくる。

だいたい、日本の畜産業は、根本的に外国との価格競争に勝てないという「なさけない状況」が昔からあって、政府の補助・保護、税制の優遇措置なしには成

り立たない。

長年、政府から公的な、各種の補助金や各種の優遇措置や支援を受け、輸入品に対して高い関税をかけた数量制限したり貿易障壁を作ってもらったことで成り立っている。それがもう既得権益のようなものになっている。

高い関税をかけても、国内生産品は、価格的に海外生産品に負けている現状がある。国内でしか売れない。また、輸入量を増やすと、需給供給バランスの関係で、価格が下がるから、政府は生産者団体から圧力を受けて輸入を抑えている。

他の産業と比べて生産性が低いから、高級品（ブランド品）として売らないと、立ち行かない（ビジネスとして成り立たない）ところがある。昨今は、安いものを生産するという努力をしなくなっている。高値安定向だから、国内で安く売ろうとは決してしない。不ぞろいなものや規格外のものは、市場に出さない。日本の農畜産物の低価格品は、市場に出にくい構造になっている。とにかく消費者に高く売りつけないと、利益にならない。消費者の高級品指向にやっと支えられている。

最近、例外的に農産物・水産物の輸出が増えている

品目があるが、特定の高級品ばかりだ。庶民の口には入りそうもないものになっている。高級食材ビジネスであり、食料というより嗜好品しょうひんというべきだろう。あるいは、ニシキゴイのような観賞用であって、食べるものではない。

畜産業では飼料に関しても（出荷時の体重の何倍もの量を必要とする）、国内で調達できれば一番いいのだが、ほとんど輸入に頼っている。国産と言っても、飼育に主要な飼料が外国産だから、威張れたものではない。飼料の良しあしによって肉の品質が決まるものだろう。私の偏見的認識では、彼らは狭い場所に家畜家禽の幼体を押し込め、餌やり・水やりを機械化し、できるだけ効率よく、安い飼料で、ぶくぶくにふとらせようとする。（出荷の時、水を大量に飲ませたりして、とは私の邪推）機械任せで品質管理をうまくやっているかもしれないが、それだけコストがかかる。

農産物にしても、同じ事情がある。コメが余っても、調整機能により高値安定にしているから、生産者は国内で不足気味の飼料用の穀物などには転作しようとしていない。輸入された配合肥料や、毒性のある農薬類をたつぷりとまき散らし、大して広くもない田畑に、生産性を上げようとして、トラクターなど大型機械を入れ

て電気や石油エネルギーを多く投入するから、コストがますます高くなっている。それにしても、たいして生産性は上がっていないのだろう。高値で売ってようやくペイする。

近年の農作業とは、主にトラクターや軽トラを運転することだから、働く側にとっておもしろくもなっていない。

⑬ 北朝鮮の偵察衛星打ち上げでまたJアラート

【毎日新聞朝刊 2023/3/1 総合】

新年度（2023年度）予算案、防衛費26.4%増、反撃能力（敵基地攻撃能力）の手段にもなる巡航ミサイル「トマホーク」の取得費用2113億円（射程1600キロ以上）が含まれる。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/22 一面】

北朝鮮が衛星を発射する通告。22日午前0時～12月1日午前0時。黄海などに（ロケットの一部が落下する）危険区域を示した。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/23 一面、追跡】

北朝鮮は21日午後10時42分、軍事偵察衛星を打ち上げ、成功したと韓国政府が報じた。通告より1時

間余早かった。日本政府は沖縄県を対象にJアラートを発令し避難を呼びかけた。通過後は解除した。深夜のJアラートに住民は困惑。」

【毎日新聞夕刊 2023/11/27 NewsFlash】

岸田首相が2023年から5年間で防衛費総額約42兆円に増やす方針を巡り総額を堅持する意向を示した。」

【毎日新聞朝刊 2023/12/9 総合】

政府与党は防衛力強化のための増税について2025年の開始を見送る方向で検討。支持率低下を回避する狙い。」

【毎日新聞夕刊 2023/12/16 NewsFlash】

米政府は、日本が求めていた中距離空対空ミサイル（AMRAAM）の売却を承認した。120基、総額は2億2400万ドル。」

【毎日新聞朝刊 2023/12/23 特集・来年度予算案】
防衛、前年度当初予算比16.5%増。農林水産省は、コメを転作して麦や大豆、トウモロコシなどの飼料を生産する農家の支援に3015億円を充てる。」

1. 発射通告

「北朝鮮が衛星を発射する通告」で、メディアは、ト

ップニュース扱いだった。これまでも、時々北朝鮮は衛星の打ち上げを試みていたことだ。その度にわれわれは、その動向を身構えなければいけないものだろうか、と私はそのニュースの扱いにいささか煩わしく思う。でも、北朝鮮の新型ロケットやミサイルの開発状況がわかるから、興味深いのかも知れない。そして、打ち上げ成功したと聞いて、脅威が増したと怖がる人がいるだろう。

通告は、北朝鮮にしては親切なことかもしれない。国際的には常識（ルール）だろうけど。

北朝鮮が通告したのは、「22日午前0時〜」だったが、それより1時間早く打ち上げたのは、彼の国の謀略の一つだろう。裏をかく目的で、故意に偽の通告情報を流したことになる。

おそらく、衛星打ち上げの責任者もどきの人が「我が国は、他国にそれほど親切ではない。テメーたちの裏をかいて、早めに打ち上げてやったのだ。あたふたした顔が見たいよ」などと、うそぶいたことだろう。敵を欺くのも、一つの兵法だろう。

信用ならない国であることを、またひとつ実証したことになる。それだから、衛星を打ち上げると言っておきながら、ミサイルを飛ばすかもしれないと不安が

る人がいそうだ。

2. Jアラート

Jアラートは、空襲警報と同様な効果を持つ。

北朝鮮のロケット（日本政府はミサイルと主張する）が打ち上げられ、飛行体の一部が日本領土・領海の上をはるか上空を飛びこしてだけで、Jアラートが鳴り響き、主要な公共交通がストップさせられる。これには毎度のことながら、私は疑問を持つ。はるか上空を通過するぐらいで、警報が鳴り響くのは、大げさである。飛行する方角で、おおまかな警報地域が対象になる。飛行する高度の計算がまるできていないから、精度が悪すぎる。もし高高度を飛行するものなら、何の危険もない。世間をいたずらに騒がせている。たとえロケットの残骸が落ちてきたとしても、隕石の落下と同じであり、確率的に物や人に当たるのはまれであるから、甚大な被害が発生するとは思えない。

3. 防衛費増額へはすみをつける

そしてJアラートは、防衛費増額の前触れでもある。政府は北朝鮮の脅威にかこつけて防衛費予算を増額する。

政府はすでに、巡航ミサイル・トマホークを大量発注した。戦争の準備をしているような状況になってい

る。攻撃能力をもつことは、戦争の抑止能力になるというのが政府の常套的な言い訳だ。北朝鮮の脅威をあり立て、自衛隊に敵基地を攻撃する「反撃能力」を備えたいがための、口実の一つになるのだろう。反撃能力は巨額な予算を必要とするものだから、「大きな脅威」の存在を理由にしたいわけだろう。そもそも、敵基地を攻撃するのは専守防衛の方針から逸脱するから、苦しい言い訳でもある。

政府は防衛費を増額することを強い意思で決めている。自民党内部の強硬派の意思でもある。主流派の意向になびきやすい風見鶏的な岸田文雄首相は、その意思を無視できないから、押し通した。

今後数年で、GDP 2% 枠まで漸増するつもりなのだ。過去にGDP 1% 枠の議論があったが、その2倍にすることを決めている。それが防衛費の、欧米などの国際的な基準値だから、と言い訳する。今どき財政に余裕がないというのに、防衛費総額約42兆円にしようというのだから、すさまじい。最新鋭の兵器の値段が高いせいでもある。最新鋭の兵器があるならば、自衛隊の司令官などは特に、どうしても欲しがらる。国内の防衛産業を活性化させたいという思惑もあるのだろう。

歳出を増やせば、その分の増税が必要になるが、はつきり言わず、先送りするのが政府のいつものやり方だ。ただし増税しなくても、防衛費は予算にしっかりと組み込む。その分を借金にしてしまっている。年度の当初予算はそこそこ控えめながら、年度末に追加予算を複数回成立させ、帳尻を合わせようとする手口が目立つ。トータルで財政の赤字が膨らむことに、もう誰もが慣れていている。

日本民族の特性として、古来より好戦的な血が騒ぐのだろう。Jアラートは、好戦的な血を騒がせる。

富国強兵というスローガンは、人々の心にいつも抱かれている。今年で敗戦から80年近くが過ぎ、「もう戦争はこりこりだ」という意識が薄らいでいる。敵対国（特に隣国）が軍備を増強すれば、自国も増強せずにはいられない。敵に攻め込まれたらどうしようという不安を抱えながらも、敵陣に攻め込むのは大好きな民族だ。それを意識し、「強兵」に走ることは自制することが必要だろう。こんな国民には「平和憲法」を押し付けることも必要だったわけだ。しかし、その効力や威光があやしくなっている。

（日本は神の国であり、戦いになれば神風が吹くから勝てる）という思い込みも激しいし、戦死者を英霊な

どと称え、死を美化する傾向があるからいけない。追い詰められた武士は切腹するのが美德、生き恥を晒さない、などという変な美意識を持つ。団体行動が大好きで、いくさでの負け組は集団自決したりしている。個人の意志など尊重されないから、庶民は追従・従属を強いられる。

⑭ オスプレイの欠陥

【毎日新聞朝刊 2022/8/19 社会

CV22オスプレイ、米軍が飛行停止、クラッチの不具合による事故が多発。】

【毎日新聞朝刊 2023/11/30 一面、社会

米軍オスプレイ墜落、屋久島沖、29日午後2時45分ごろ。横田基地所属の6機のうちの1機とみられる。CV22空軍仕様。防衛省は墜落ではなく、不時着水との認識を示した。

午後2時35分ごろ付近を飛行中のオスプレイから「緊急着陸したい」という連絡を入れていた。

屋久島住民の目撃によると、エンジンから火が出て、真逆さまに会場に落ちた。機体が180度ひっくり返った。島を一度離れたオスプレイが再び戻ってきて

屋久島空港に向けて降下してきた。事故の直前「ボボボ……」と車のマフラーに何かが詰まったような音を聞いた。エンジンの周りから火が出ていた。海面から70〜80メートルの高さで機体から黒煙が上がり、火の玉が見えたという。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/8 クローズアップ

米軍は「安全懸念なし」と言っていたが、一転、オスプレイを異例の全面停止にした。墜落原因の調査は難航しそうだが、米軍が「オスプレイ全般に特有のリスク」を懸念したとみられる。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/5 火論

オスプレイ墜落と脅威、米軍内部の調査（2022年6月の墜落に関して）で、回転翼のギアとエンジンをつなぐクラッチが何らかの原因で滑るのだという。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/8 一面

米、全オスプレイを飛行停止にした。空軍の初期的な事故調査の結果、機材の不具合が墜落原因だった可能性が浮上したとする。2022年、CV22でクラッチの不具合に関する事故が相次いだため約2週間にわたって飛行を停止したことがある。】

【毎日新聞朝刊 2023/12/10 社会

米議会は、2024年会計年度の国防予算に海軍向け

のCMV22オスプレイ1機の新規調達を盛り込んだ。AP通信によると、米軍は約480機を運用している。当初400〜600機の外国への販売を見込んでいたが、開発中から事故が相次ぎ、開発費が高騰。米国外では日本が陸上自衛隊向けに計17機購入するだけ。オスプレイは50年代まで運用が続く見通し。次期機種はティルトローター機V280を計画している。】

1. 屋久島沖の事故

乗員8人全員が亡くなったが行方不明になったかのケースで、政府が「不時着水だ」と言うのは的外れだろう。米軍に付度したかのように、たいした事故ではないと見えていたのだろうし、オスプレイをかばっている。オスプレイの欠陥を包み隠したい意図が透けて見える。

ともあれ、このオスプレイは、墜落の10分前ごろに、すでに異常が発生していたとみられる。たまたま近くに見えていた屋久島の空港に着陸しようとした。しかし、空港に降りたつことをあきらめたかのように、海上に出ると、いきなりひっくり返って落ちてしまった。かなりな衝撃で、海面にたたきつけられた状況がうかがえる。

結果的に言えば、屋久島に降りるべきだった。パイロットには、故障の程度がよくわからなかったのだろう。ひっくり返って落ちてしまうような緊急性のある事態だとは考えなかった。まだ飛べると思つて、屋久島空港に降りるのを躊躇したわけだろう。オスプレイなら、降りようと思えば、空港でなくても、平坦な陸地であれば、どこでも降りられたはずだ。着陸するチャンス逃したことが大きい。

片方の不調のエンジンがさらにおかしくなった。オスプレイの場合、片方のエンジンが止まったとしても、もう一方のエンジンが正常ならば、飛び続けることができるようになっていくという。パイロットはそのつもりだったのかもしれない。しかし、エンジンから煙や火を噴き出し始め、片方のエンジンで飛び続けるための「バランス機構」もおかしくなつたとみえ、ひっくりかえつた。

2. オスプレイの定めなところ

日本では2016年12月13日に名護市沖の浅瀬にオスプレイが不時着水し、機体が大破した事故があった。それでも乗員の命は失われずに済んだ。空中給油訓練中に、給油ホースがオスプレイのプロペラに接触したためだったとされ、機体の欠陥のせいではな

かつたのだろう。この場合、ホースに接触してすぐに落ちたわけではなく、20分以上さまよつた挙句、海岸に近い海に突っ込んだ。得意の垂直着陸はできなくなつていたわけだ。そもそも行動範囲が通常のヘリコプターの4倍あるとされるオスプレイに空中給油訓練が必要かどうかは、私は疑問をもつた。空中給油が必要ということは、オスプレイの航続距離は運用面で十分であることだ。

しかし、オスプレイの事故といえば、クラッチの不具合が数年前から知られていた。今回の事故で、米軍側が再度飛行停止にしたのは、直したつもりがまだ直つていないことに気付いたのだろう。クラッチの不具合は、根深い問題になっている。その不具合で、エンジンが不調になり、火災も起こすリスクも高いことが明らかになっているから、重大だ。これほど事故が多発しては、ほとんど使い物にならないレベルだ。

オスプレイは、見るからにバランスの悪い機体だろう。短い翼の左右の先端に大きなプロペラとエンジンがついている。この画像を始めて見たとき、「こんな珍奇な機体を開発するのはかなり難しそうだ」と、技術者の端くれだった私は一見して思ったほどだ。そして、これを操縦するには、かなりの熟練が必要だと。

操縦に関しては、コンピューター制御でアシストすることは可能だ。また、主要な部品、エンジンなどが故障した場合の対応も、考えられているはずだ。しかし、それらが十分かどうかは疑わしい。

その後、この分野に興味のある私は、基地の公開日に展示されている機体を近くから見る機会があった。上空を飛んでいるオスプレイを見る機会もあった。エンジンがやたらと大きい、輸送機としては小さい、という印象を受けた。そして「燃費の悪そうな機体だ」

大方の危惧されていた通り、開発当初から事故続きで、軍用機としての制式化が危ぶまれていた。それでも、垂直離着陸の機能があること、高速な飛行速度の性能が買われ、制式化された。「少しぐらいの損耗（機体が失われること）は無視しよう」と軍の甘い判断が下されたのだろう。膨れ上がった開発コストの元を取ろうとしたのかもしれない。

高速な飛行性能があると言っても、通常のヘリコプターと比べた場合であって「すこし早い」程度だ。機体の大きさからは、輸送機として小型の部類であり、大きな重いものは運べそうにない。人員を運ぶためである。つまり「高速なヘリコプター」としてのメリットだけだ。

まとまった数が製造され、運用に入っても、事故の多さが目立つ。新規に開発する航空機には、欠陥がつきものだが、試験施行するなどして原因がわかると、すぐに直されるものだ。しかし、オスプレイの場合、欠陥が根本的なところにあるらしく、いつまでたっても直らない。

それまでの事故報告で、原因として「動力系のクラッチが弱い」ことが指摘されている。原因がほぼ分かっているのに、根本対策ができていないのだから、なさない。しかも、その弱さが数年前からわかっていたことなのに、有効な対策もせず、米軍はオスプレイを飛ばし続けた。

また屋久島沖で同じようなことが起きたわけだ。それは米軍というより、メーカーの責任だろう。技術的に何とかならないものかと、はがゆく思う。

クラッチの損耗による故障と考えられるが、それなら、消耗部品として交換する頻度を高めればよいわけだが、そうしてもダメなのだろう。

メーカーの技術陣が原因を追究できていない、あるいは、メーカーは開発に難航したために、もう改良に熱心になれないのかもしれない。優秀な技術者はさっさと手を引いているのかもしれないし、残っている技

術者が「もう直すのはうんざりだ」と、サジを投げるような声が私の耳に聞こえてくる。これでは、また起きる可能性が高い、と言わざるを得ない。

メーカーが一つや二つの部品を見直し改良したところで、根本対策にはならないかもしれない。オスプレイの後継機V280には、根本対策を入れることを期待したい。いつになることなら……。

⑮ 羽田C滑走路での衝突事故

【毎日新聞朝刊2024/1/3 一面、社会】

1月2日午後5時55分ごろ、羽田空港滑走路で日航機が海保機と接触、炎上。日航機は新千歳空港からのエアバス350機で、乗客367人と乗員12人が搭乗していた。海保機は羽田航空基地所属のポンバルデアMA722機で、新潟航空基地に救援物資を輸送するため6人が搭乗していた。】

【毎日新聞朝刊2024/1/4 一面、社会】

羽田衝突、海保機が滑走路に誤って進入したか。管制記録に進入許可なし。海保機長は「離陸許可を得た」と認識。管制官指示を勘違いか。】

【毎日新聞朝刊2024/1/5 一面】

羽田衝突、管制が海保機の進入に気付かなかった。レーダー情報を生かせなかった。】

【毎日新聞朝刊2024/1/7 一面、社会】

羽田衝突、海保機は日本航空機の着陸を知らず、滑走路に進入したか。管制官はモニターを見落とししたか。今後常時監視にする。

羽田空港にはレーダーなどを使って滑走路や誘導路を監視するシステムがあり、検知した機体は、管制塔内のモニター正面に表示される。管制官は（塔の上からの）目視による状況確認に加え、その画面を見ることが機体の位置や動きを把握する。システムに「滑走路占有監視支援機構」があり、誤って機体が滑走路に進入すると画面上で滑走路の画像が黄色に点滅、機体のそれは赤色に表示される仕組みだ。】

1月3日午後5時55分、羽田C滑走路で離陸しようとして一時的に止まっていた海保機（海上保安庁所属）と、着陸態勢に入り降下してきた日航機（日本航空旅客機）が衝突し、両機とも炎上し大破した。日航機には乗員乗客379名が乗っていた。その脱出に関して、もたついたところもあったと伝えられるが、ともかく全員脱出できて、よかった。

海保機の乗員5人は脱出できず、死亡したから、よかつたなどとは言っていない、近年まれにみる大事故だった。炎上する日航機の映像を見て、私は驚いた。「これも大地震の後に引き続き災害の一つか？」

海保機は1月1日に起きた能登半島地震に対しての救援物資を運ぼうとしていたのだから、当らずとも遠からず。

これは単なる接触ではなく、明らかな衝突事故だ。

メディアでも衝突と言いなおされた。その後には判明したことで、C滑走路が長さ約90メートル、幅30メートルにわたって損傷していたというから、大きな衝撃だった。ヤボな、たればの話ですれば、海保機がもう少し滑走路の後ろ側にいたら、あるいは日航機が少し前方で着地すれば、接触しなかったのに。

事故原因について僭越ながら、私の考察を示そう。

これまでの報道から得られた情報で、まとめよう。偶然に悪い条件が重なった感がある。

先ずこのケースは、過密な滑走路運用が背景にある。C滑走路では、次々に航空機の離発着がある。飛び立つ航空機もあれば、降りたつ航空機もある。航空機の種類も大きささまざまだ。それぞれ順番待ちをしなければならぬほど混雑する。そんな混雑する空港から、

海保機が飛び立つのはどうだったか。

1月の午後5時55分といえば、トワイライトゾーンだ。日が沈んで、辺りがほとんど暗くなる時刻だ。人間の目はまだ暗さに慣れないから、車の交通事故が一番起きやすい時間帯でもある。滑走路上の機影など、見えにくい。海保機の機体は小さいから、よけい見にくい。それに、一日の終わりを迎え、疲れが出やすい。人々の気が緩む時期でもあろう。

ヒューマンエラー（人的ミス）の要因が次の三者にあることに絞られる。それを防ぐための方策が求められよう。

1. C滑走路の管制官たち

担当の彼ら2人は、許可していない海保機がC滑走路上にノコノコ出てきて停止し、40秒間エンジンをふかし離陸しようとしていたことに気づかなかつた。目視していなかった。目視で見えにくいときのために、滑走路上の機体や何かの存在を監視するレーダーによるモニター装置があるというのに、それにも目を配っていないかつた疑いがある。レーダーならば、夜の暗さは関係ない。怪しい機体が滑走路上にいれば、カラーで表示する便利な仕掛けになっている。管制官としては、そんなモニター画面ひとつをじっと見つめている

わけにも行かないのだろう。他の業務をこなしている間に、結果的にそれを見落としたことになる。

2. 海保機のパイロットたち

滑走路の手前の停止位置にいるべきなのに、管制官から「離陸の許可を得た」と思い込んだ。海保機の乗員でたつた一人生き残った機長が証言した。彼らパイロットたちは離陸の順番が一番（テイクオフ・ナンバ―1）であることを知らされていたから、「まっさきに離陸していいのだ」と誤解したと推測される。操縦室には主副の二人パイロットがいて、その他の乗員もいたけれど、みんな誤解したことになる。「離陸一番」を「離陸許可」と受け取った。

この時間帯のC滑走路では、離陸専用ではなく、着陸にも運用されていることに海保機のパイロットたちは意識していなかった疑いがある。滑走路に降り立つ機体があることを知らなかったし、知らされてもいなかった。先に降り立つ日航機が一番であって、海保機が一番ではなかったわけだ。

結果的に管制官は、離陸の順番が一番であることを言うよりも「日航機の着陸完了後に離陸の準備をせよ。それまで待て」と念をおすべきだった。離陸の順番が一番であることなど、よけいな一言だった。

そして海保機の機長らは滑走路にのこのこ出ると、前の滑走路ばかり見て、後方の空から日航機が迫ってくることに気付かなかった、ぶつけられるまで。

3. 日航機のパイロットたち

日航機は追突した側になる。操縦席には3人のパイロットがいたという。滑走路上に海保機がいることに気付かなかった。暗い中、滑走路の誘導灯だけが明るく光り、海保機が発するかすかな標識灯など見えなかったと思われる。動いているものならともかく、静止している機体については目視では無理なのだろう。

パイロットたちに「滑走路に航空機がいるはずがない」という思い込みがあったことだろう。彼らの常識では「管制がちゃんとしているから、滑走路に航空機がいることなどありえない」ことなのだ。だいたい着陸態勢のとき、目は計器ばかり見ており、耳は管制官との通信に気を取られているものだろう。衝突の直前に、パイロットは眼前のプロペラ機に気付いたというが、回避するには遅すぎた。